

広島市戸坂町

禅昌寺西遺跡発掘調査報告

1980.3

禅昌寺西遺跡発掘調査団

序 文

広島市戸坂町の松笠山・茶磨山の山麓一帯には、数多くの遺跡が分布しています。とりわけ、巴形銅器が出土した西山258m貝塚は、高地性集落の遺跡として全国的にも有名です。戸坂町は、広島市の市街地に近い関係から、早くから大・小の住宅団地の建設が相次ぎました。調査されることなく消滅に至った遺跡も多いことと思われます。

今回、発掘調査を行った禅昌寺西遺跡は、禅昌寺の移転用地と墓園の造成に起因するものです。当初、計画区域内にはもう一か所、禅昌寺東遺跡と名付けた遺跡が発見されましたが、こちらは施主である禅昌寺住職横山正賢氏のご厚意により、幸いにも、現状保存の措置がとられました。

発掘調査を経て、今日、調査報告書を刊行することができたのは、宗教法人禅昌寺をはじめとして、山陽工業株式会社・広島県教育委員会・広島市教育委員会など各方面のご援助、ご指導の賜物と申せましょう。

おわりにあたり、調査費の負担のみならず、酷暑の続く中、たびたび発掘現場へ足を運ばれ、また発掘作業にも参加されるなど、終始暖かい眼で調査の進捗を見守っていただいた横山正賢氏には、まことに感謝の念にたえません。ここに記して厚くお礼申し上げます。

昭和55年3月31日

禅昌寺西遺跡発掘調査団長

松 崎 寿 和

例 言

1. 本書は、広島市戸坂町に於ける墓園（戸坂霊園）造成工事に係る禅昌寺西遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、広島市文化財審議会委員、広島大学名誉教授松崎寿和が団長となり、宗教法人禅昌寺代表役員横山正賢と委託契約を結び、昭和53年7月10日から25日まで実施した。
3. 本書の執筆は石田彰紀が担当し、松崎寿和がこれを監修した。
4. 本書掲載の航空写真は、はにわ会会員井手三千男氏により提供を受けた。
5. 第1図に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の25,000分の1地形図を複製したものである。
(承認番号) 昭55中複, 第98号。

目 次

序 文

例 言

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経過	4
III	遺構	6
1	外観	6
2	主体部	6
IV	遺物	17
V	まとめ	24

挿 図 目 次

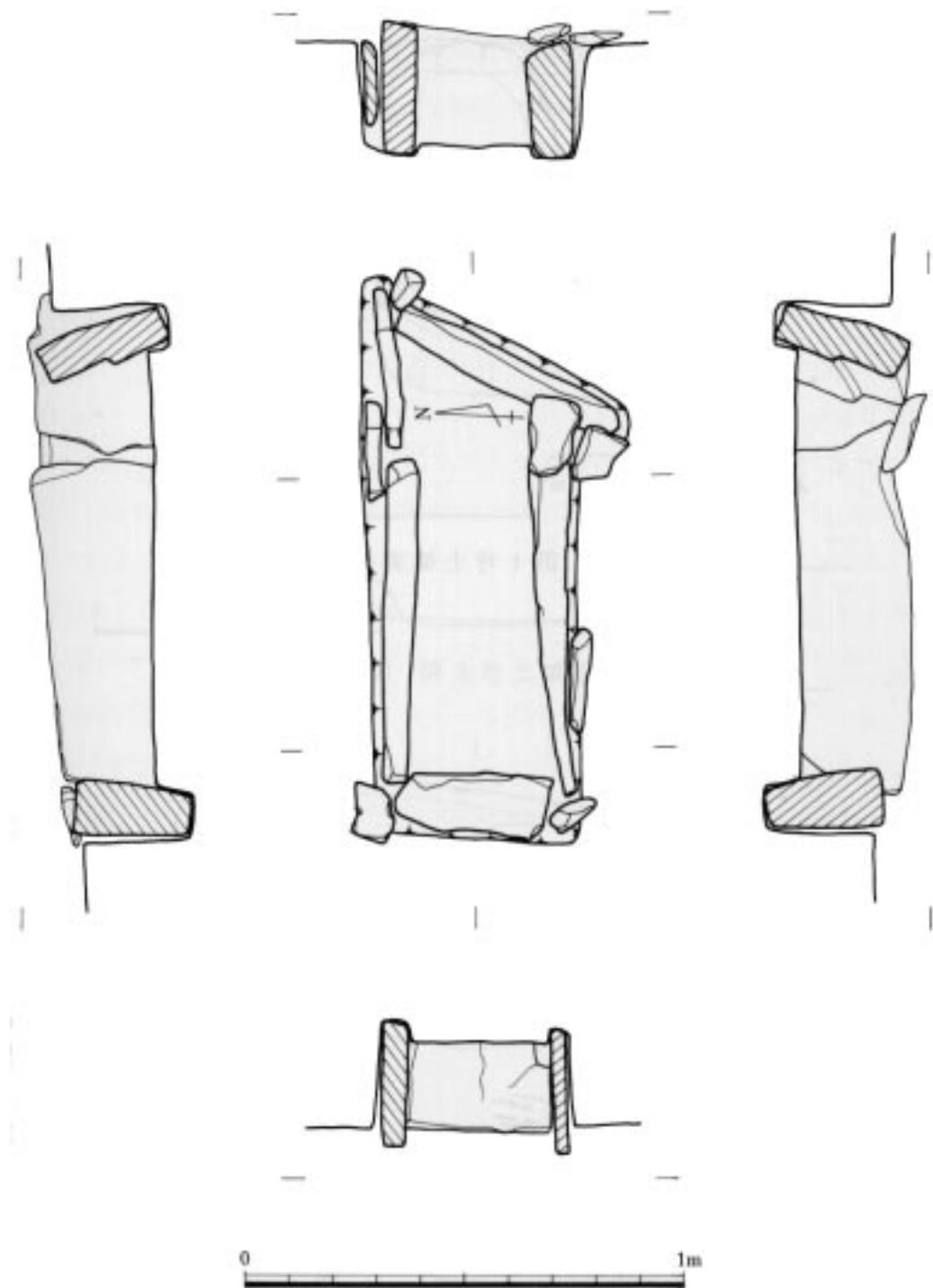
第 1 図	禅昌寺西遺跡の位置と周辺遺跡分布図	
第 2 図	戸坂町山根遺跡出土弥生式土器実測図	1
第 3 図	戸坂町桜ヶ丘古墳内部主体実測図	3
第 4 図	禅昌寺西遺跡遺構配置図	7
第 5 図	A 主体実測図	8
第 6 図	A 主体出土遺物分布図	9
第 7 図	B 主体実測図	9
第 8 図	第 1 号石棺実測図	11
第 9 図	第 2 号石棺実測図	12
図 10 図	第 3 号石棺実測図	13
第 11 図	第 1 号土壙実測図	14
第 12 図	C 主体・第 2 号土壙実測図	14
第 13 図	第 3 号土壙実測図	15
第 14 図	第 4 号土壙実測図	15
第 15 図	石鏃実測図	17
第 16 図	弥生式土器実測図	17
第 17 図	A 主体出土鉄剣実測図	18
第 18 図	A 主体棺外出土鉄器実測図	19
第 19 図	C 主体出土鉄刀実測図	20
第 20 図	C 主体出土鉄器実測図	22
第 21 図	土師器壺棺実測図	23

付 表 目 次

付表 C 主体出土鉄鏃各部計測一覧	21
-------------------	----

図版目次

図版 1	空からみた禅昌寺西遺跡 (○印部分 現況)	図版 7	a 第 3 号石棺 (南より)	
図版 2	a 禅昌寺西遺跡遠景 (↓部分 1, 2 は東遺跡)	b 第 1 号土壙 (西より)	図版 8	a A 主体遺物出土状態 (西より)
b 禅昌寺西遺跡全景	図版 9	b C 主体遺物出土状態 (東より)	a 戸坂町桜ヶ丘古墳主体部	
図版 3	a 箱式石棺の配置状況 (開棺前)	b A 主体棺外出土鉄器 (番号は第 18 図に一致)	図版 10	A 主体出土鉄剣 (1・2)
b 箱式石棺の配置状況 (開棺後)	図版 11	C 主体出土鉄刀 (3)	a 土師器壺棺	
図版 4	a A 主体 (東より)	図版 12	弥生式土器 (番号は第 16 図に一致)	
b A 主体 (西より)	図版 13	b 戸坂町山根遺跡出土弥生式土器		
図版 5	a B 主体 (西より)			
b C 主体 (西より)				
図版 6	a 第 1 号石棺 (南より)			
b 第 2 号石棺 (南より)				



第1図 禅昌寺西遺跡の位置と周辺遺跡分布図

- | | | | |
|--------------|--------------|----------------|----------|
| 1. 禅昌寺西遺跡 | 2. 禅昌寺東遺跡 | 3. 中小田古墳郡 | 4. 湯釜古墳 |
| 5. 惣田古墳 | 6. 山根遺跡 | 7. 龍泉寺古墳 | 8. 八幡山古墳 |
| 9. 宮の山古墳 | 10. 桜ヶ丘古墳 | 11. 城北学園グランド遺跡 | |
| 12. 西山258m貝塚 | 13. 西山210m貝塚 | 14. 中山貝塚 | |

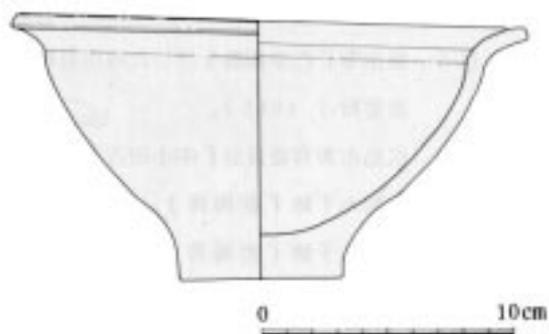
Ⅰ 遺跡の位置と環境

禅昌寺西遺跡は、広島市戸坂町字龍泉寺山にあって、標高331.5mの松笠山（通称東山）から西に向かって派生する小丘陵の尾根上に位置している。遺跡の最高所の標高は86.0m、眼前に戸坂町から祇園町にかけての一带が眺望できて、この地を墓地として選地した意図が当然のごとく感じられる。

遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて連続的に営まれた墳墓群で、箱式石棺5基、土壙墓5基から成っている。遺跡のある丘陵は後世の地形の変更が著しく、封土等の上部施設について明らかにし得なかったのは残念である。

本遺跡の所在する戸坂町の東の松笠山、西の茶磨山（通称西山）にはさまれた湾入部で、その西側を太田川が曲流している。この太田川は地元では新川と呼ばれていることからわかるが、往古よりしばしばその流路を変えていて、現在の古川はその一旧流である。ところで、この太田川は古代においては安芸・佐伯両郡の郡界とされ、旧太田川の東側にあたる現祇園町西原・東原および戸坂町が『倭名類聚鈔』にみえる安芸郡幡良郷に比定されている地域である。^{注1}そして、この一帯においては、現在なお、航空写真や地形図等により条理地割と考えられる方格状土地区画を認めることができる。この中で戸坂町の湾入部は、旧幡良郷の中核をなしていたと考えられるが、このことは第1図にもみることく、東山・西山の山麓一帯に数多く遺跡が分布していることから肯定できよう。

さて、戸坂町内に分布する遺跡の大半は、戸坂町くるめ木神社宮司故木村八千穂氏によって踏査確認されたものである。^{注2}そしてこれらの遺跡の中には、禅昌寺西遺跡に前後して営まれたいくつかの興味ある遺跡を見出すことができる。以下、それらの遺跡の概略について述べたい。



第2図 戸坂町山根遺跡出土弥生式土器実測図

戸坂町の東隣り中山町には弥生式前期の遺跡として知られる中山貝塚がある。^{注3}戸坂町の位置・環境からみて、この地にもかなり早い時期に弥生式文化が波及したことが予想されるが、前期の鉢形土器を出土した山根遺跡の存在はまさにこれを裏付けるものであろう^{注4}（第2図）。弥生中期の遺跡はくるめ木神社所蔵の資料の中に中期に属すると考えられる土器が含まれているものの遺跡としてははっきりしていない。弥生後期に入ると遺跡数は増加する傾向をみせる。高地性集落として著名な西山210m貝塚や西山258m貝塚、多量の土器が出土した城北学園グラウンド遺跡などはその主なものといえる。この中で、西山258m貝塚からは巴形土器・鉄器が発見されていて注目される。^{注5}

古墳時代に入ると遺跡の数は更に急増する。三角縁神獸鏡・車輪石が出土した中小田第1号古墳を含む中小田古墳群は、戸坂町のすぐ北に接する高陽町小田にある。^{注6}八幡山古墳^{注7}、宮の山古墳^{注8}、桜ヶ丘古墳^{注9}（第3図）などはいずれも戸坂町内に所在する前期古墳である。禅昌寺西遺跡の上方、標高180mの高所にある湯釜古墳は、割り石小口積みの横穴式石室を内部主体とする積石塚である^{注10}。また、禅昌寺西遺跡に近い惣田古墳群は町内では代表的な後期古墳群で、皮袋形埴瓶が出土している^{注11}。

このように戸坂町には特異な内容をもつ遺跡が少なくないが、禅昌寺西遺跡もまた、町内では初見の弥生墳墓、豊富な鉄器を副葬した古墳などを含み、戸坂町域の古代の社会構造を知る一助となろう。

注1 広島市役所編『新修広島市史第1巻 総説編』（1961）。

注2 木村八代穂『戸坂町誌』（1977）。

注3 松崎寿和・潮見浩『広島県中山遺跡』（「日本農耕文化の生成」1961）。

注4 昭和53年6月15日導水管理埋設工事中に弥生式土器が発見された。

注5 藤田等『巴形銅器を出した西山貝塚調査概報』（「日本考古学協会 昭和40年度大会発表要旨」1965）。

注6 広島市教育委員会『中小田古墳群発掘調査報告』（1980）。

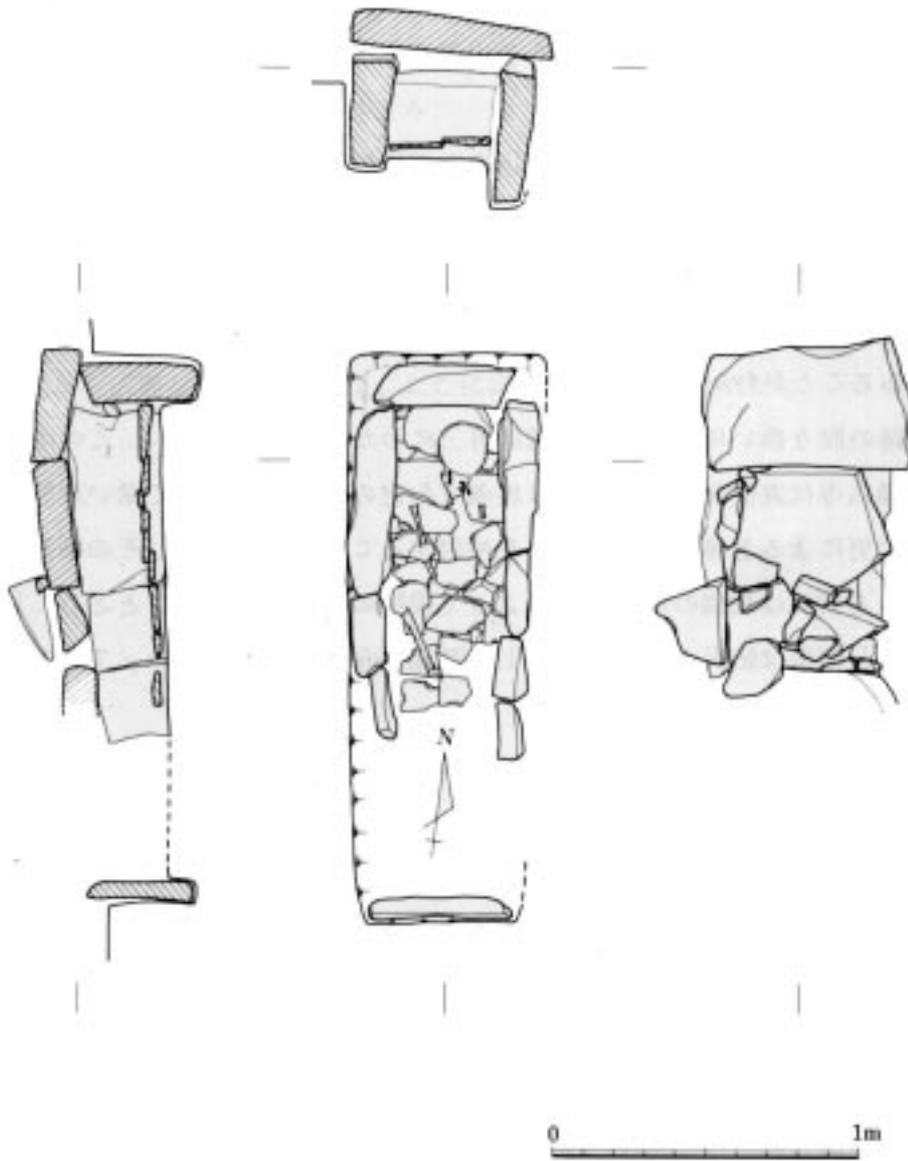
注7 木村八千穂『前掲書』。

注8 木村八千穂『前掲書』。

注9 昭和53年4月、戸坂町桜ヶ丘団地内の市道部分で導水管理埋設工事中地下約3mのところから発見された箱式石棺である。棺内からの出土遺物は皆無であったが、石棺の構成は禅昌寺西遺跡A主体に類似する。

注10 湯釜古墳の主体部は従来、竪穴式石室とされてきた。しかし、石室は2.0×2.3mの正方形に近い平面プランを呈し、主体部の北側に羨道と考えられる構造を有することから筆者はこれを横穴式石室と考えたい。恐らく割石小口積みで上半を持ち送りによってドーム状の天井を形成する石室であろう。同様の構造をもつものとして高陽町矢口の上矢口古墳をあげておく。

注11 木村八千穂『前掲書』



第3図 戸坂町桜ヶ丘古墳内部主体実測図

II 調査の経過

広島市教育委員会では、昭和53年6月15日、広島市戸坂町字龍泉寺山の丘陵において墓園造成の計画があることを知り、社会教育課主事石田彰紀が現地を踏査し、2基の古墳と壺棺1を発見した。現地は既に計画地内の樹木伐採を終え、取り付け道路の建設と防災工事を進めていた。

市教育委員会は上記のことを県教育委員会文化課に報告するとともに造成主である宗教法人禅昌寺と施工者である山陽工業株式会社に対し、遺跡の取り扱いについて協議を求めた。

6月19日、教育委員会文化課指導主事松村昌彦と石田は計画地内に於ける遺跡の範囲と内容を把握するため、再度現地に赴き試掘調査を行った。その結果、遺跡は二つの丘陵にまたがって存在し、その内容は東側丘陵では竪穴式石室を内部主体とする円墳（禅昌寺東遺跡）、西側丘陵では3基の箱式石棺（禅昌寺西遺跡）であることがわかった。

遺跡の取り扱いについての協議は再三にわたって行われたが、この中で、宗教法人禅昌寺代表役員横山正賢氏は埋蔵文化財の重要性について深い理解を示され、設計変更による遺跡保存の可能性を検討することを約された。その結果、東側丘陵にある古墳は墓園の規模縮小によって現在のまま保存することとし、西側丘陵にある石棺群は防災上および工法上の問題から記録保存をはかって欲しいとの申し入れがあった。

これを受けて県文化財課、市社会教育課は西側丘陵所在の石棺群は記録保存もやむなしと判断し、禅昌寺側の、台風到来時期までに防災擁壁を完成させたいという要望もあって、急拠、広島市文化財審議会委員、広島大学名誉教授松崎寿和を団長とする調査団を編成し、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、造成主である宗教法人禅昌寺代表役員横山正賢と禅昌寺西遺跡発掘調査団長松崎寿和との委託契約により、昭和53年7月10日から7月25日まで延べ14日間にわたって実施した。

なお、調査団の構成は次のとおりである。

調査団長	広島市文化財審議会委員、広島大学名誉教授	松崎 寿和
調査員	広島市教育委員会社会教育課文化財係長	有谿 盈雄
	広島市教育委員会社会教育課主事	柳川 康彦
	広島市教育委員会社会教育課主事	石田 彰紀
	可部郷土史研究会会員	三浦 丈一
	可部郷土史研究会会員	松浦 譲二

調査協力者（50音順）

石原 進	生 塩 里 美	河野 恵子	近藤 玲子
酒井 泉	砂崎 ひとみ	時川 光子	三宅 信三
山本 信夫	吉田 仁		

なお、調査委託者である宗教法人禅昌寺、山陽工業株式会社、戸坂公民館、祇園公民館の方々には調査を円滑に進めるために多大のご配慮をいただいた。また発掘調査の実施と報告書の作成にあたっては、県教育委員会文化課、広島大学考古学研究室から広範な教示を受けた。ここに記して謝意を表したい。

III 遺構

1. 外観（第4図）

本遺跡のある丘陵は、背後を水路兼用の林道によって断ち切られ、尾根部も一部が山畑として開墾されているなど後世の地形変更が著しく、調査前には墳丘の判別は困難であった。しかし第4図にみるように、ほぼ東西にのびる丘陵の前面すなわち西側は幅80cm、深さ40cmほどの溝状遺構によって区切られている。また側面の北側は丘陵そのものが急傾斜をなすため、わずかに地山を削平することによって墳丘裾として整え、西側の溝状遺構とはほぼ直角に連結している。そして、この連結部分からほとんど地山に密着した状態で板石が検出された。なお、墳丘の東側・南側は地形変更の影響を受けていて詳細はわからないが、いずれにせよ、本遺跡は長辺を東西にとり10m前後・短辺7m前後・高さ1m前後の方墳系列に属する墳丘を有しているようである。

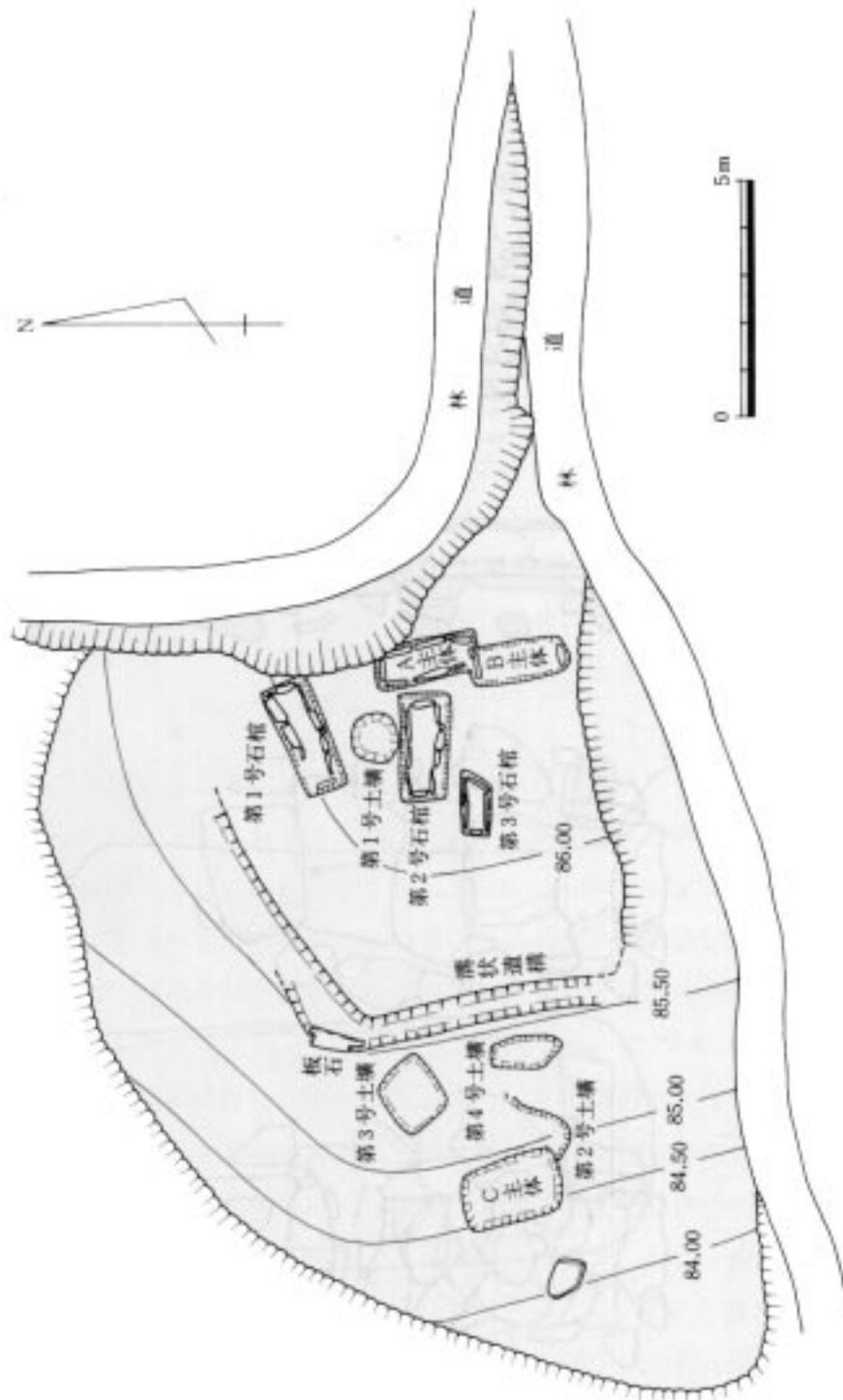
2. 主体部

本遺跡において発見された主体部は、墳丘内から石棺5基・土壙墓1基、墳丘外から土壙墓4基であった。以下、それぞれについて概略を述べたい。

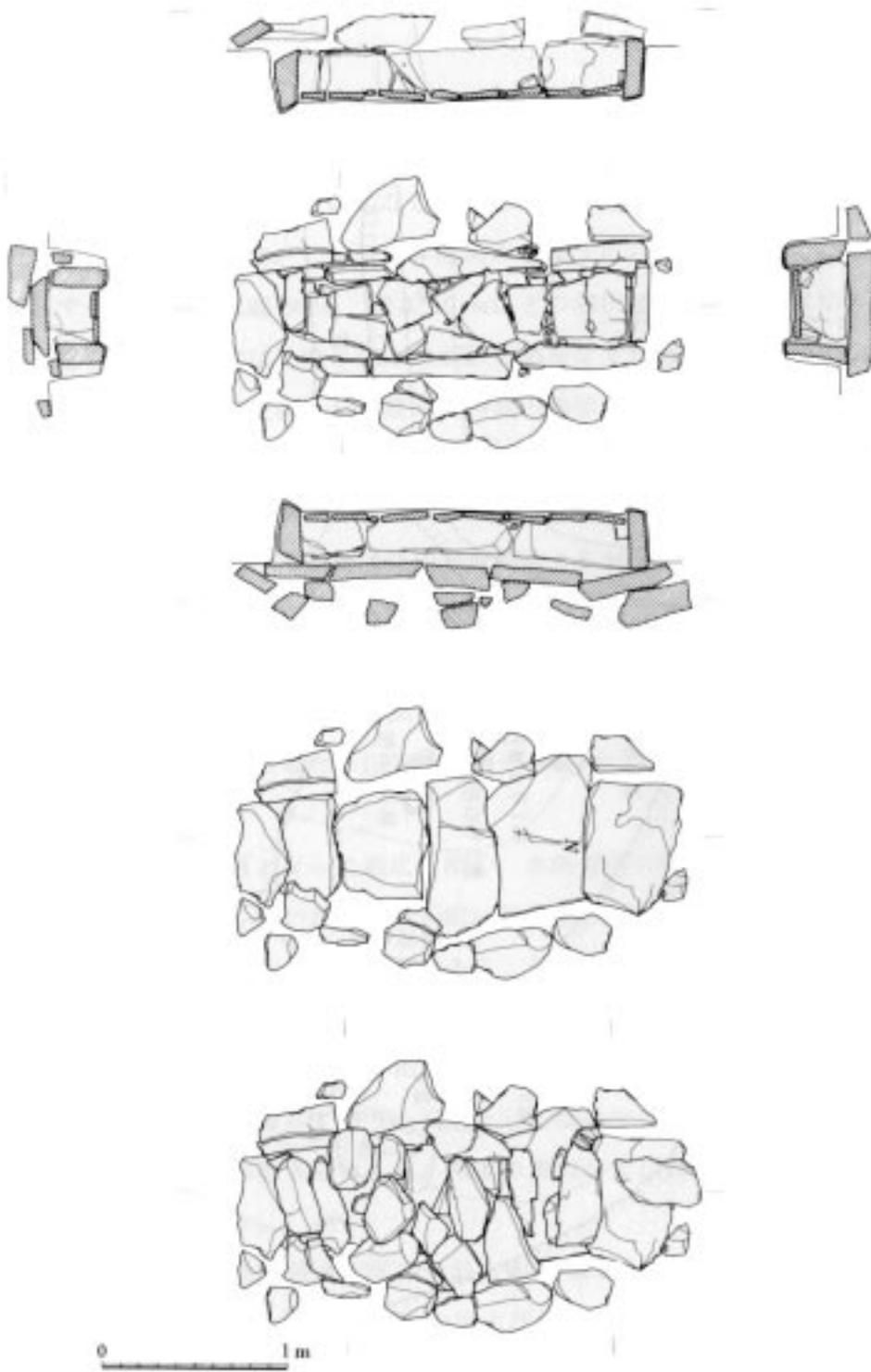
A 主体（第5図）

本遺跡発見の契機となった箱式石棺で、水路兼用の林道の切土面に側壁の裏側の一部が露出していた。この石棺は後に述べる理由から方墳系列に属する墳丘の主体部と考えられるものである。石棺はまず200×70cmほどのあまり余裕のない土壙を掘り込み、その土壙を棺材に合わせて再調整した後に9枚の板石で四壁を構成している。棺蓋は5枚の板石を用いるがその上面および縁辺を大小の割石で覆っており、石棺としてはかなり丁寧な造りである。床面には扁平な割石が敷き詰められ、棺蓋の裏面および四壁の一部に赤色顔料の付着が認められた。

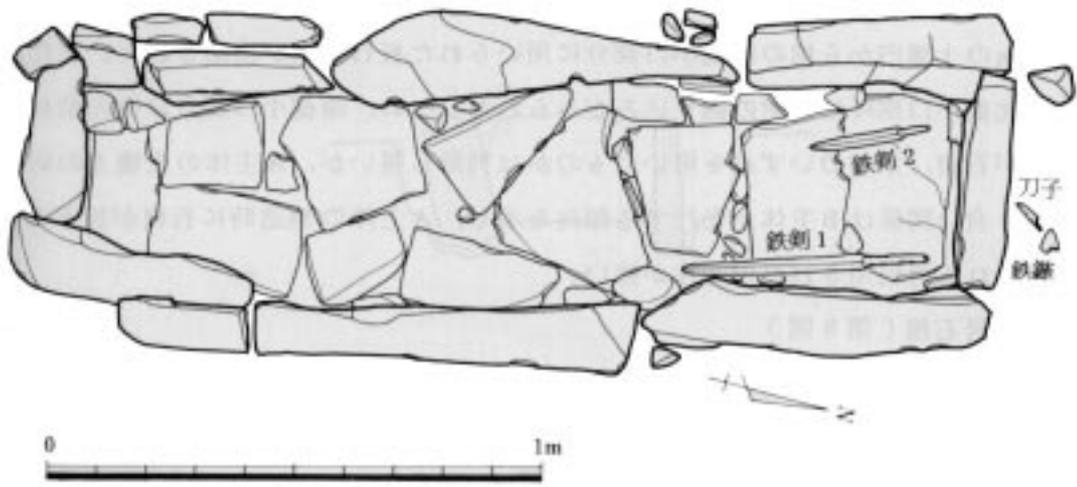
石棺の規模は内法で長さ178cm・最大幅は48cm・高さ30cmを測る。棺の長軸方向はN12°Wで、頭位は遺物の出土状況および石棺の形態からみて北側であろう。なお出土遺物が、棺内から鉄剣2・最も北寄りの蓋石の下部から無茎広根鉄鏃1・鉄製刀子1を検出した（第6図）。



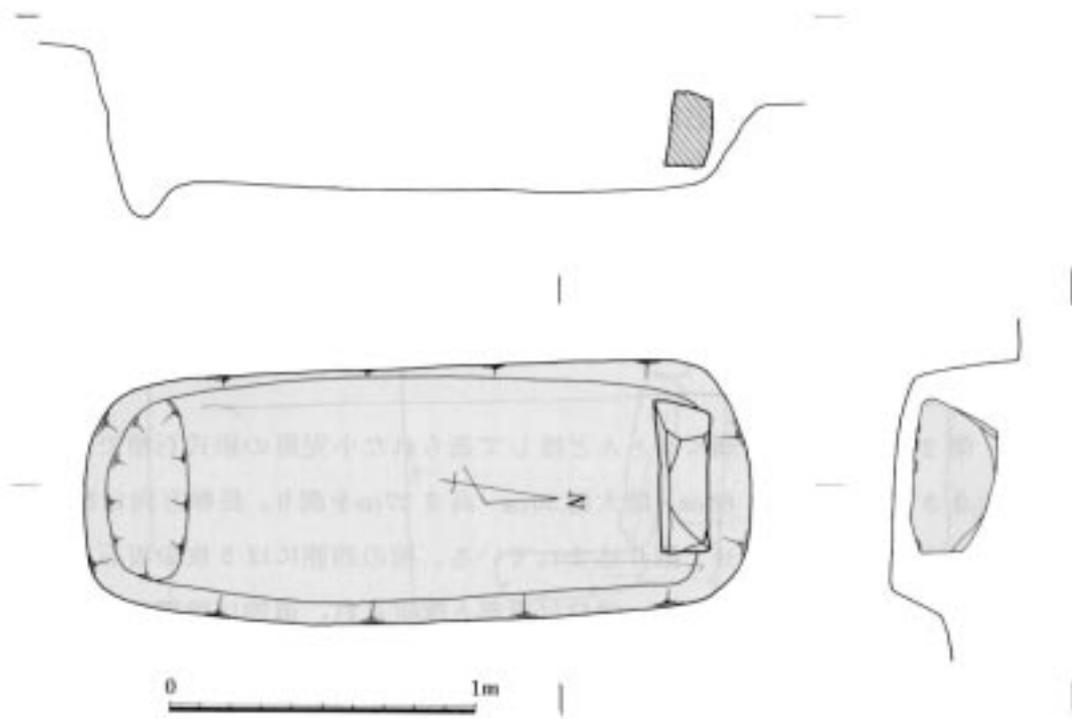
第4图 禅昌寺西遺跡遺構配置图



第5图 A主体实测图



第6図 A主体出土遺物分布図



第7図 B主体実測図

B主体（第7図）

A主体の南に接して営まれた石棺である。長軸方向をN9°Wにとる220×80cmの土壇内から棺の南側小口部分に用いられた板石のみが検出された。また、北側小口部には棺材の掘り込みがみられた。なお、南側小口部分以外の棺材が石材、木材のいずれを用いたものかは判断が難しいが、A主体の土壇との切り合い関係はB主体が先行する傾向を示し、A主体の築造時に石材が抜きとられて再利用された可能性が強い。

第1号石棺（第8図）

第1号石棺はA主体の北1.3mほど離れた位置にある箱式石棺で、250×100cmの地山を掘り込んだ土壇内に埋置されている。この箱式石棺は発見時において既に棺蓋と一部の側壁を欠していた。石棺の規模は内法で長さ202cm・最大幅47cm・高さ31cmを測り、長軸はN71°Eの方向にとる。頭位は石棺の幅から東部であろうと推定される。棺内からの出土遺物は皆無であり、棺材に赤色顔料の塗布はみられなかった。

第2号石棺（第9図）

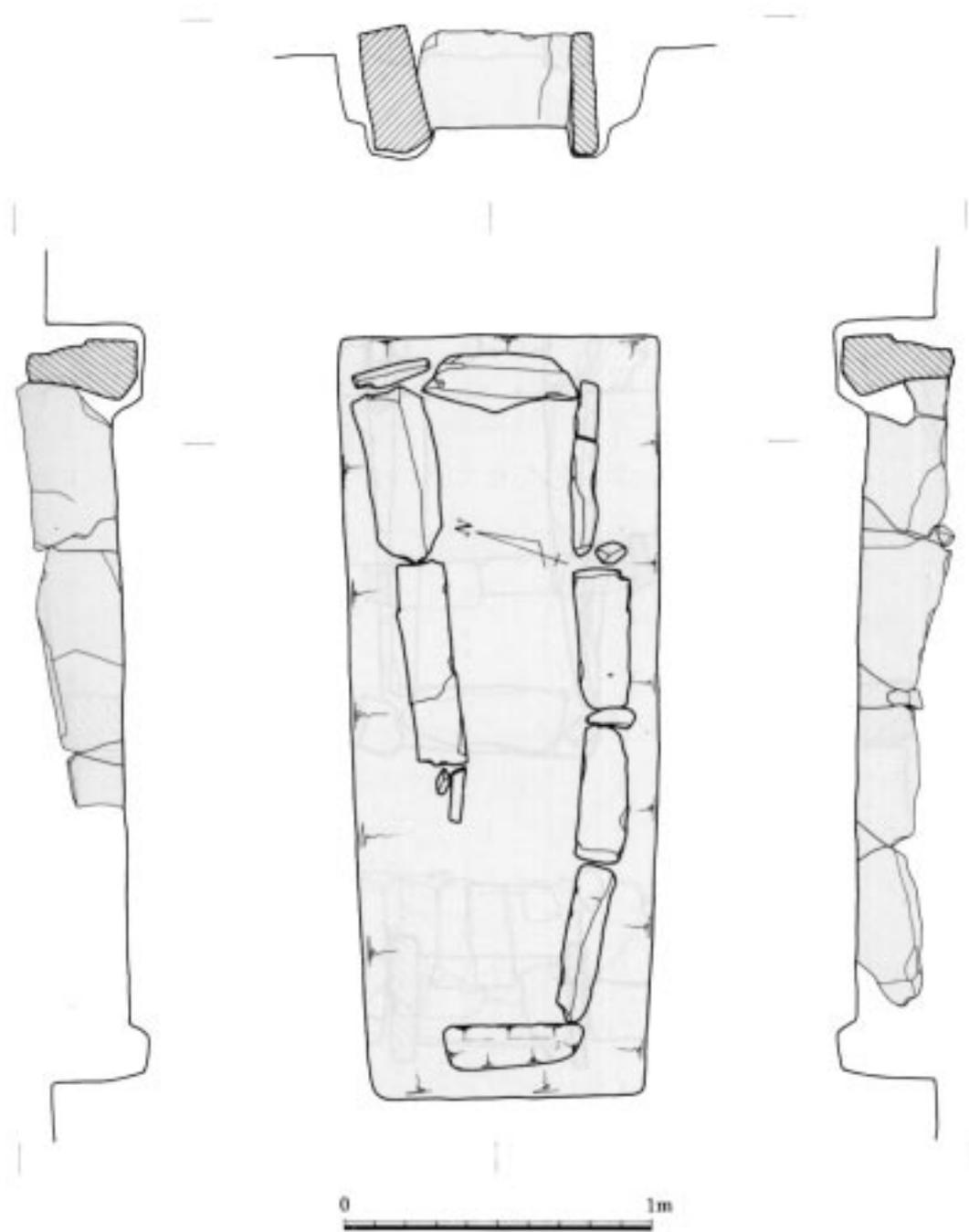
第2号石棺は第1号石棺の南側、A主体とほとんど接する位置にある。220×110cmの比較的ゆったりした土壇内に、内法で長さ173cm・最大幅46cm・高さ33cm・長軸方向をN63°Eにとる箱式石棺が埋置されている。棺の四壁は10枚、棺蓋は7枚の板石で構成し、蓋石のうち1枚がとりはずされていた。棺内東寄りから頭骨片を検出したのみで、赤色顔料の塗布はみられなかった。

第3号石棺（第10図）

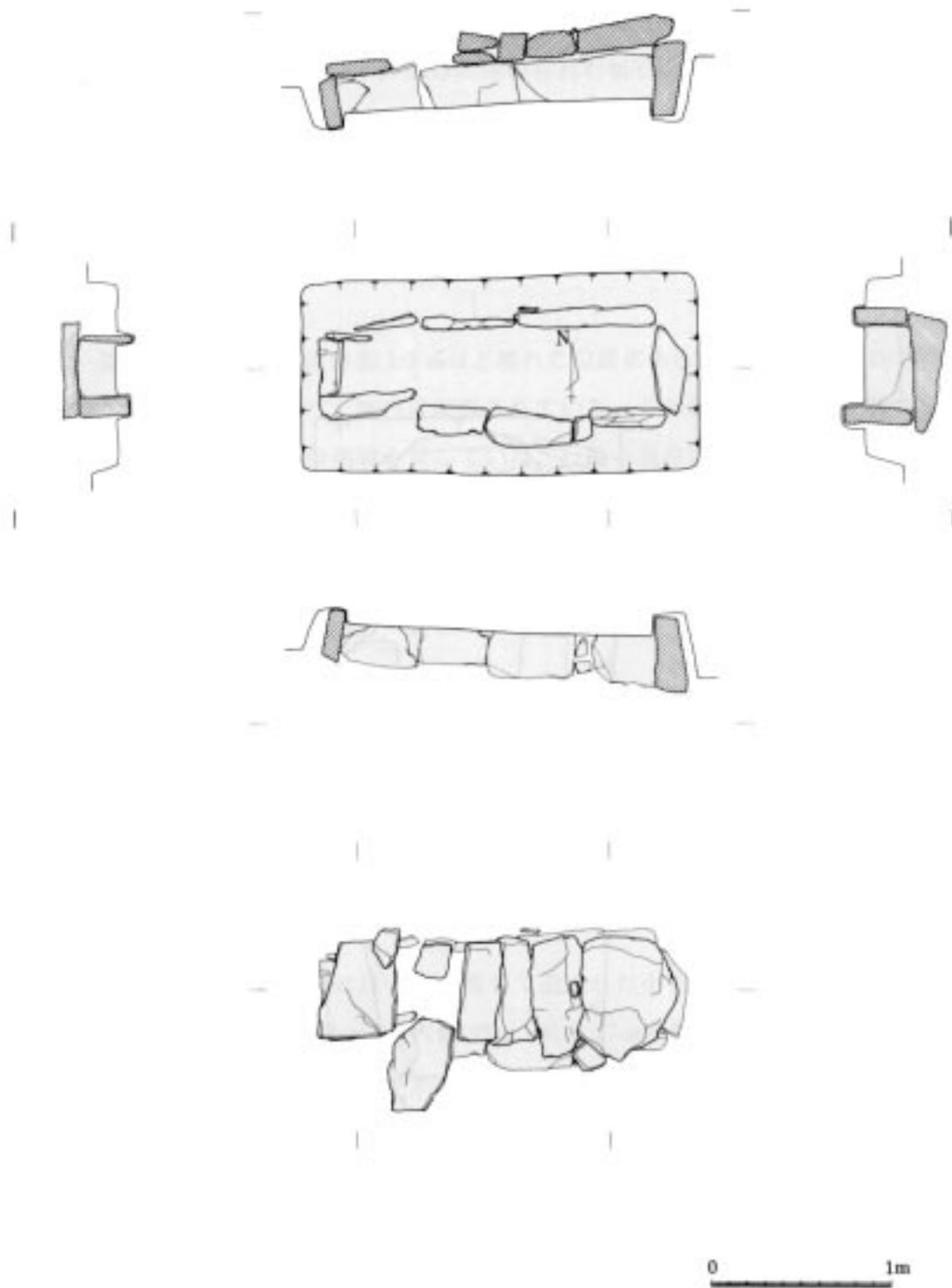
第2号石棺の南西隅にほとんど接して造られた小児用の箱式石棺である。大きさは内法で長さ88cm・最大幅30cm・高さ27cmを測り、長軸方向はN82°E、土壇は棺材に合わせて掘り込まれている。棺の四囲には5枚の板石を用い、棺蓋は既に失われていた。頭位は東部と推定され、遺物は皆無であった。

第1号土壇（第11図）

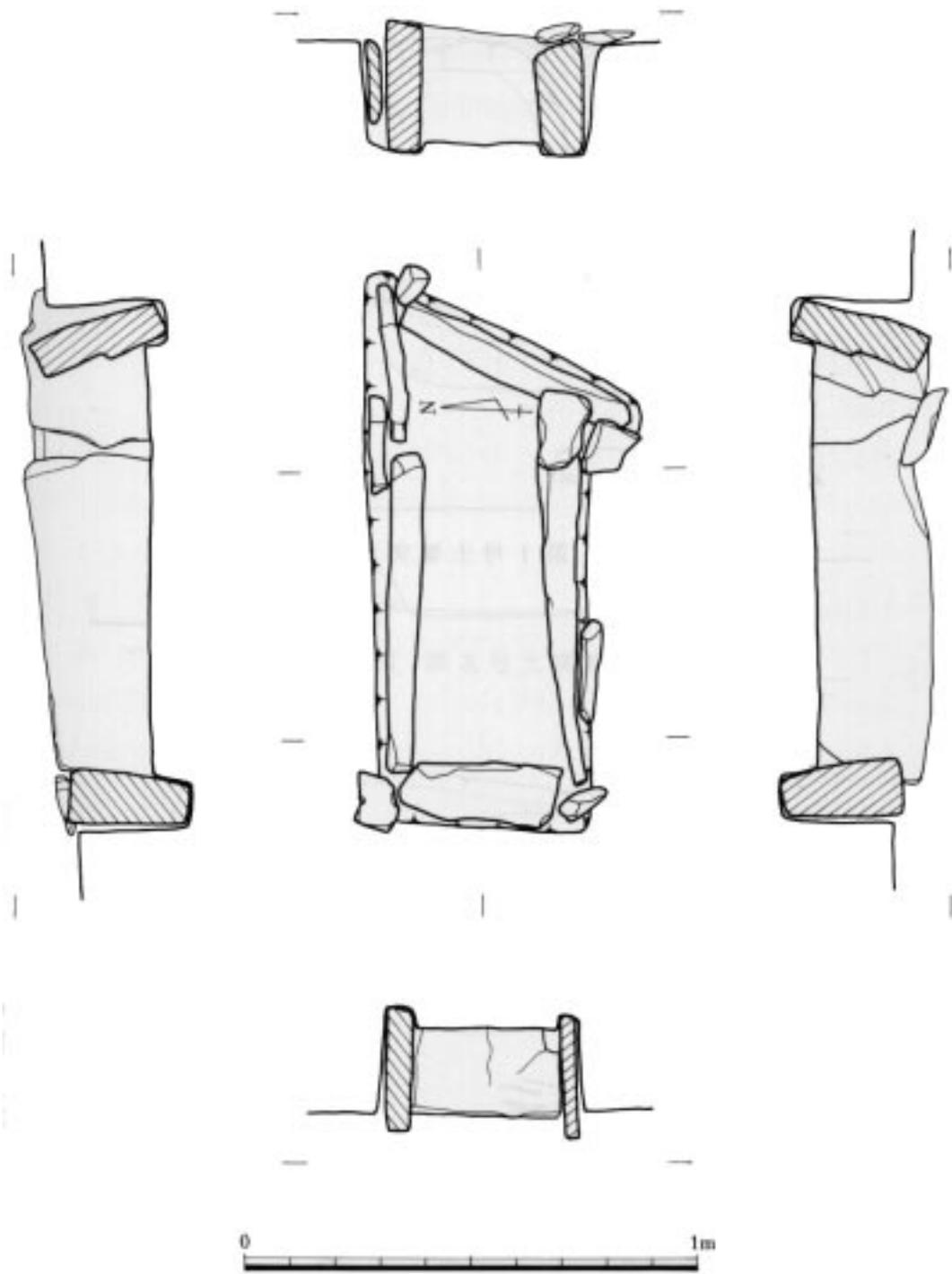
第1号石棺と第2号石棺との間にある115×122cmの円形土壇で深さは27cmを測る。土壇内から壺棺に使用されたものと考えられる弥生式土器の口縁部などを検出した。



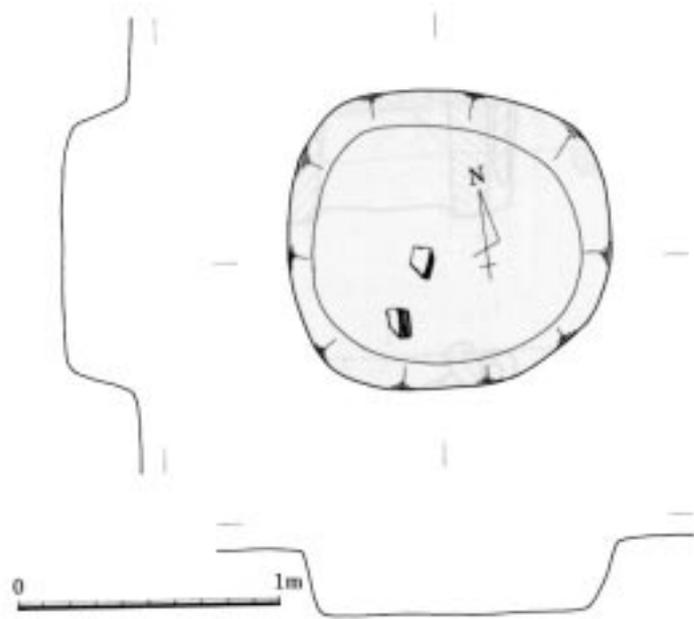
第8図 第1号石棺実測図



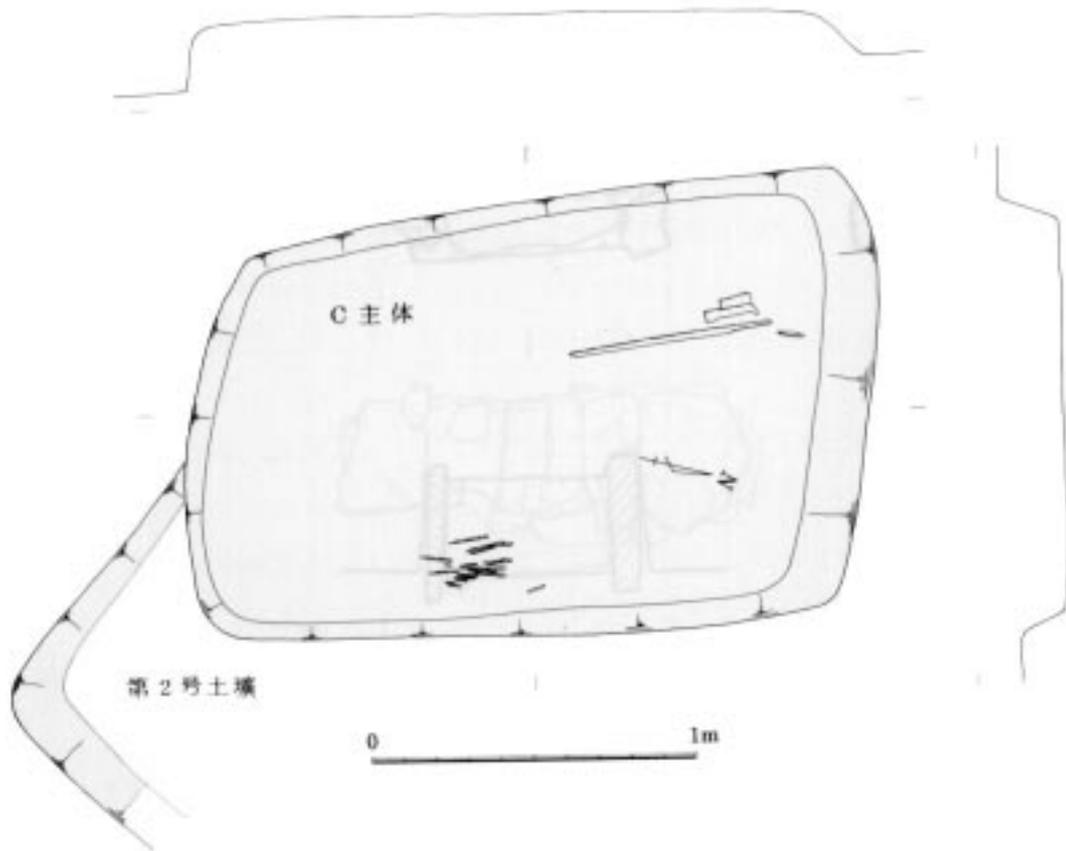
第9图 第2号石棺实测图



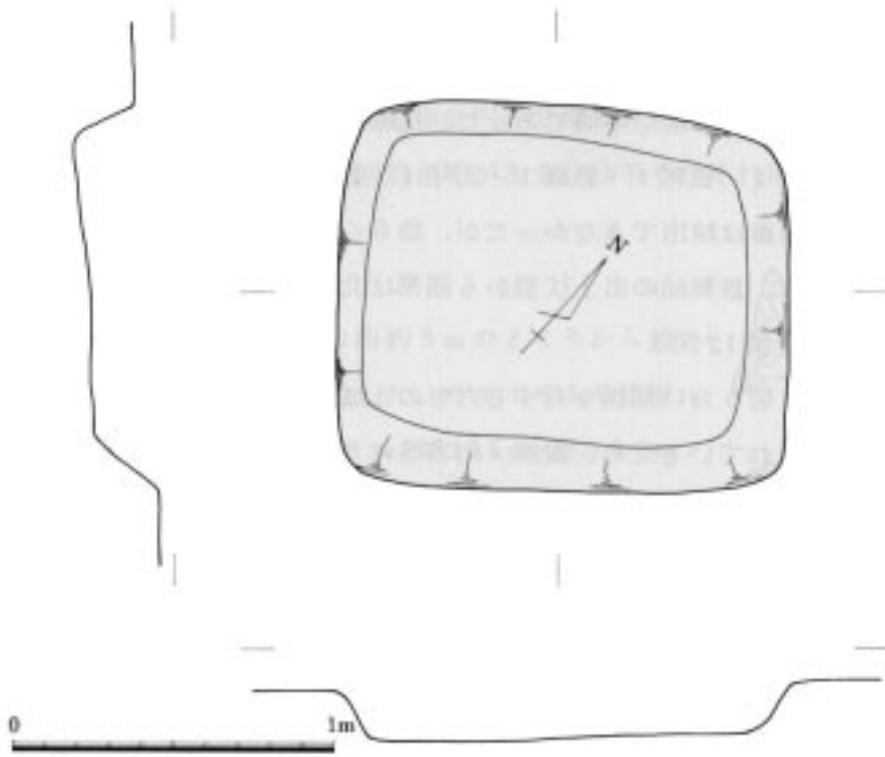
第10图 第3号石棺实测图



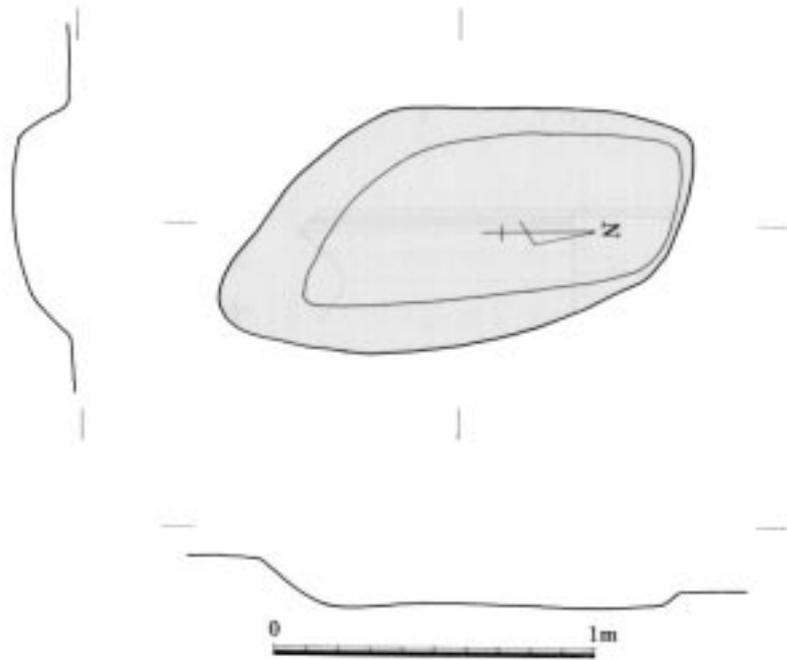
第 1 1 图 第 1 号土壤实测图



第 1 2 图 C 主体 · 第 2 号土壤实测图



第 1 3 図 第 3 号土壙実測図



第 1 4 図 第 4 号土壙実測図

C 主体（第12図）

A主体の西方約10mのところであり、溝状遺構の外に位置する主体部で墳丘等の上部施設は全く不明であった。長軸方向N19°Wの210×130cmの土壙内から鉄刀1・鉄斧1・鉄鎌1・刀子1・鉄鏃13の出土をみた。土壙内から棺材の痕跡は検出できなかったが、恐らく木棺直葬の手法をとるものであろう。なお、鉄製品の出土状態から頭部は北側と考えられる。

第2号土壙（第12図）

C主体と切り合い関係を有する方形の土壙である。C主体によって主要部分を破壊されているため、規模・内容等については不明である。

第3号土壙（第13図）

溝状遺構の外縁に掘り込まれた120×139cmの方形の土壙で、深さも24cmと浅い。土壙内からの出土遺構はなく、埋葬施設として利用されたかどうかはわからない。

第4号土壙（第14図）

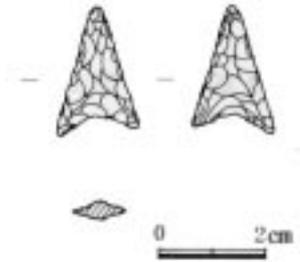
第2号土壙と溝状遺構にはさまれた不整形の小土壙で長さ147cm・最大幅75cm・深さ19cmを測る。土壙内からの出土遺物は皆無で第3号土壙とともにその用途は不明である。

IV 遺物

本遺跡出土の遺物には石鏃、溝状遺構の内外で得られた若干量の弥生式土器片、A主体およびC主体の副葬品、土師器壺棺がある。以下それぞれについて述べたい。

石鏃（第15図）

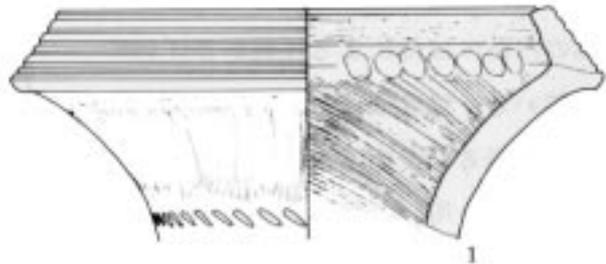
溝状遺構の内側、第3号石棺の西約3mのところから地山にほとんど密着した状態で出土した。サヌカイトを使用した打製のもので大きさは全長26mm・幅15.5mm・厚さ3.5mmを測る。



第15図 石鏃実測図

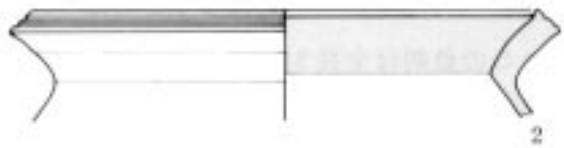
土器1（第16図の1）

第1号土壌内出土の径19.5cmの複合口縁を持つ壺形土器の破片である。口縁部上半を内側に折りまげて広い施文帯をつくり、そこにヘラによる6条の凹線をめぐらし、口縁端および器表内外に横ナデ調整を施す。複合口縁接合部の内側には接合時の指による圧痕が残る。口縁下半部は内面に右下方向の、外面にたて方向の丁寧なハケ調整を施している。また頸部にはヘラにより左上方向の刺突文をめぐらしている。胎土は精選されたものを用い、焼成は良好で堅緻、全体的に明るい褐色を呈す。なお、この壺形土器は壺棺墓として使用された可能性が強い。



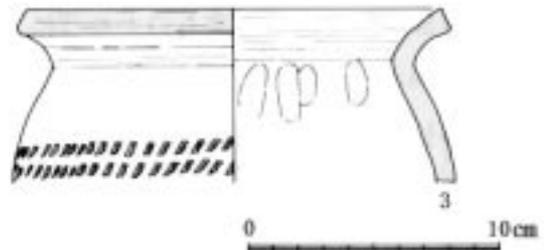
土器2（第16図の2）

丘陵北側斜面の地山直上から出土した甕形土器の口縁部である。口径は20.0cmを測り、肥厚しながらくの字状に外反し、口縁端には2条の凹線をめぐらす。頸部直下はヘラ削り、口縁部の器表内外は丁寧な横ナデ調整を施している。焼成は良好で淡黄褐色を呈し、胎土には細かい砂粒を含む。



土器3（第16図の3）

土器2に近接して出土した甕形土器である。口径は16.4cm、器高は胴部の下半を欠しており不明である。口縁部はやや肥厚気味に外反し、口縁端はわずかに凹みが認められる。肩部に櫛

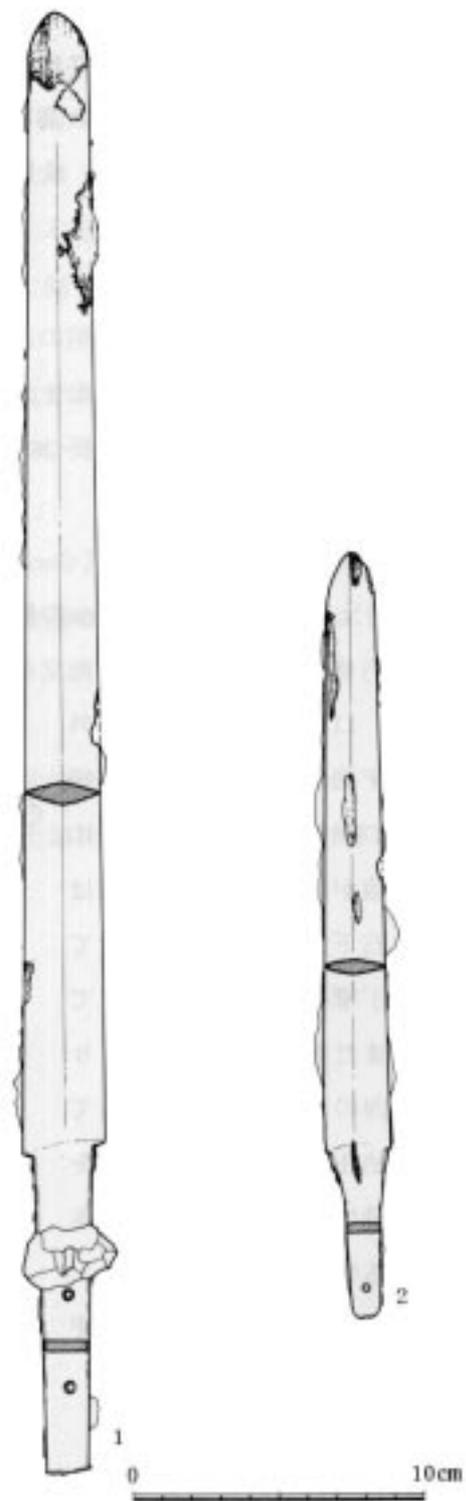


第16図 弥生式土器実測図

齒状工具による幅1cmの刺突を2段にわたってめぐらす。器表には丁寧な横ナデ調整を行い、肩部の内面には指による圧痕がわずかに残っている。焼成はきわめて良好で堅緻、全体的に明るい赤褐色を呈し、胎土は精選したものを用いている。

鉄剣1（第17図の1）

鋒を南に向けて石棺の北東寄りから出土したこの鉄剣は全長51.0cmの完形品である。刃部には鑄がみられ、茎部には直径3.0mmの目釘孔が2か所穿たれている。なお、茎部中央やや関部寄りのところに3.2cm×2.4cmの鉄塊が錆着しているが、これは刀装具の可能性もある。また刃部の一部に木鞘の残存がみられる。全体的に細身の実用的な鉄剣で、各部の計測値は次のとおりである。



第17図 A主体出土鉄剣実測図

全長 51.0 cm

刃部

長さ 39.5 cm

幅

関部 2.9 cm

中央 2.6 cm

厚さ

中央 0.8 cm

茎部

長さ 11.5 cm

幅

関部 2.1 cm

中央 1.7 cm

厚さ

中央 0.4 cm

鉄剣 2 (第 17 図の 2)

棺内の北西から出土したもので、全長 26.7 cm の短剣である。刃部には木鞘の一部が残存し、わずかに錆がみられるものの刃部の断面はレンズ状に近い。また関部はやや不明瞭で茎尻から約 1 cm のところに直径 2.5 mm の目釘孔 1 がある。なお、各部の計測値は次のとおりである。

全長 26.7 cm

刃部

長さ 21.0 cm

幅

中央 2.3 cm

厚さ

中央 0.55 cm

茎部

長さ 5.7 cm

幅

中央 1.2 cm

厚さ

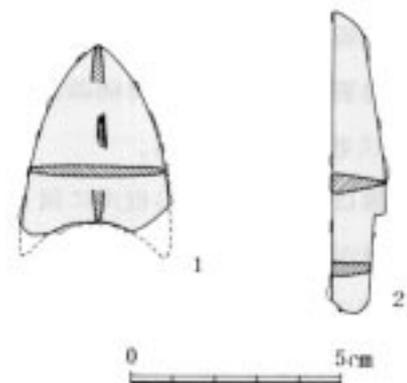
中央 0.35 cm

鉄鏃 (第 18 図の 1)

A 主体の棺外、蓋石の下から出土した。無茎平根式あるいは無茎平造腸挟三角形式に分類される鉄鏃で、大きさは長さ 47 mm・最大幅 2.5 mm を測る。身の中央部にわずかではあるが木質の銹着が認められる。

刀子 (第 18 図の 2)

鉄鏃とともに出土した全長 7.3 cm の刀子である。刃部の長さ 5.0 cm・最大幅 1.2 cm・背の厚さ 0.5 cm で鋒に向うにしたがって幅を減じている。茎部は長さ 2.3 cm・幅 0.9 cm・厚さ 0.3 cm を測る。



第 18 図 A 主体棺外出土鉄器実測図

鉄刀（第19図）

土壇内北西寄りから南の鋒に向けて出土した全長63.9cm、全体的に細身で内反り気味の鉄刀である。刃部の銹化面には一部木鞘が付着し、茎部にはわずかではあるが布が銹着している。茎尻は丸く仕上げられ、直径2.5mmほどの目釘孔1が穿たれている。関部は欠損しているがおそらく鈍角に切られたものであろう。刀の各部の計測値は次のとおりである。

全長 63.9cm

刃部		茎部	
長さ	50.9cm	長さ	13.0cm
幅		幅	
関部	3.0cm	関部	2.3cm
中央	2.6cm	中央	1.8cm
厚さ（背部）		厚さ	
中央	0.8cm	中央	0.4cm

鉄鏃（第20図の1～13）

C主体南東寄りの部分から鋒を北に向け、束ねられた状態で出土した鉄鏃は合計13本を数えた。鉄鏃の大半は比較的保存が良好で、頸部篋被部分から茎部にかけて竹製と考えられる矢柄の基部を桜皮で巻き締めている状態で観察できる。

鉄鏃はすべて有茎尖根式に属し、少なくとも7種類の細分が可能であろう。これらの中で特徴的なものは鉄鏃1で、身部に連続する頸部の片側に長さ1.4cmの棘状の逆刺をもっている。また鉄鏃2は腸挟を有する唯一の例である。

なお、それぞれの鉄鏃の各部の計測値および特徴は付表に示すとおりである。



第19図 C主体出土鉄刀実測図

鉄鏃番号	全長	身 部 頸 部						茎部長さ	特 徴
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
1	16.0	2.7	1.5	0.3	8.7	0.7	0.4	4.6	柳葉式 両丸造 篋被
2	18.2	2.6	1.4	0.35	12.0	0.65	0.4	3.6	柳葉式 両丸造 篋被 腸袂
3	18.0	3.5	1.65	0.5	9.7	0.8	0.45	4.8	柳葉式 両丸造 篋被
4	推16.3	推2.6	1.35	0.35	9.6	0.7	0.35	3.1	柳葉式 両丸造 篋被
5	推15.2	推2.7	1.3	0.3	8.8	0.7	0.4	3.7	柳葉式 両丸造 篋被
6	15.1	3.1	1.5	0.4	8.1	0.8	0.5	3.9	柳葉式 両丸造 篋被
7	18.8	2.65	1.3	0.3	12.4	0.8	0.4	3.75	柳葉式 両丸造 篋被
8	推14.9	推2.0	1.25	0.3	9.6	0.8	0.4	3.3	片刃箭式 両丸造 篋被
9	16.0	1.7	1.2	0.3	10.1	0.7	0.4	4.2	五角形式 両縞造 篋被
10	現15.8	2.0	1.0	0.25	13.1	0.8	0.4	-	五角形式 両丸造 篋被
11	現14.4	推1.5	推0.9	0.3	11.4	0.75	0.4	-	五角形式? 篋被
12	現9.7	-	-	-	-	0.85	0.5	-	篋被
13	現12.0	-	-	-	-	0.75	0.5	4	篋被

付表 C 主体出土鉄鏃各部計測一覧表(単位 = c m, 計測値の頭にある推は推定, 現は現状を示す)

鉄斧 (第20図の14)

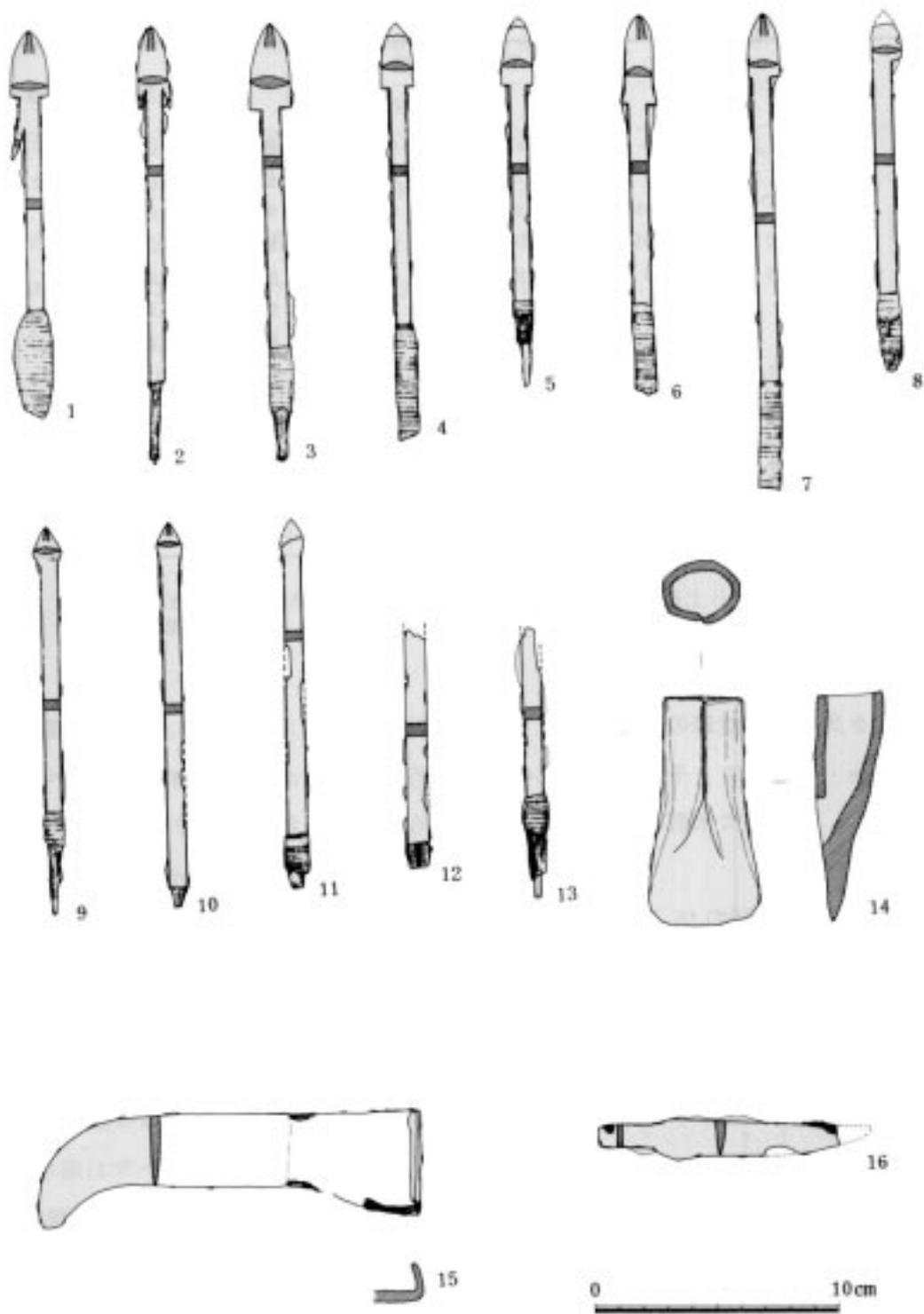
刃部を北に向け鉄鏃の下から出土した。全長9.4cm・刃部の幅4.5cm・袋部の幅3.2cm・重さ180gを測る。袋部の形状は内法で2.5cm×1.3cmの扁平な八角形を呈し、銹化面に木質の付着がないことからおそらく斧頭のみで副葬されたものであろう。

鉄鎌 (第20図の15)

鉄斧に重なって先端を北に向け出土した。曲刃鎌の完形品が刃部に比べ基部がかなり幅広となっているのが特徴といえる。大きさは全長15.7cm・基部の幅4.4cm・刃部中央の幅3.0cm・厚さ0.5cm・折り返し部の立ちあがり1.2cmを測る。基部の一部にわずかながら木質が付着している。

刀子 (第20図の16)

鉄刀の茎尻に近接し、鋒を南に向けて出土した。先端を欠しているが、復原長は約11.2cm・現存長9.9cm・最大幅1.7cm・刃部の背の厚さ0.4cmを測る。刃部および茎部の一部に布が銹着していることから布に包まれて副葬されたものであろう。

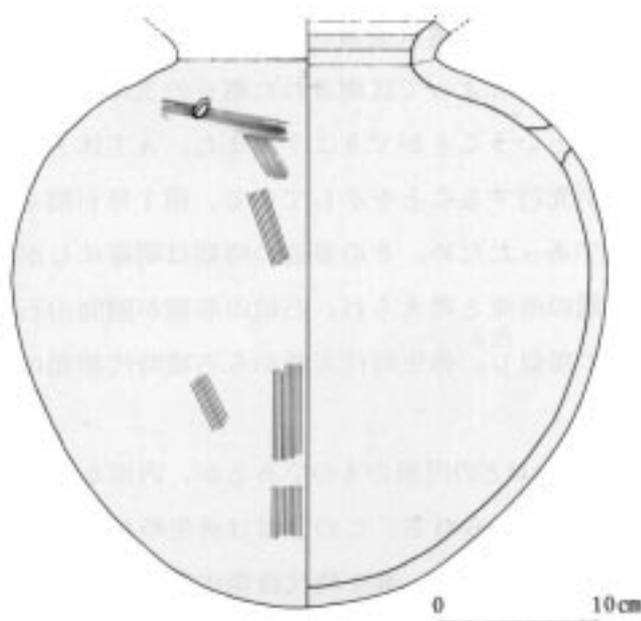


第 20 图 C 主体出土鉄器実測図

土師器壺棺（第21図）

この土器は墓園の取り付け道路造成中にC主体の西20mのところから発見されたものである。土器内には土砂が充満していたが、出土時の詳しい状況は残念ながら知ることはできない。土器は口縁部を欠くが頸部以下は完全である。頸部の内径は13.0cm・現存の高さ37.2cmを測る。胴部はほぼ球形をなし、その最大径は中央部よりやや上位にあって37.4cm、底部は丸底を呈している。頸部の下方には0.8×1.3cm・2.0×2.1cmの2か所の不整円形の穿孔が行われている。器表の頸部から肩部にかけては丁寧な横ナデ調整、以下は右下方向、たて方向のハケ調整を施している。また、器胴内面には横方向のハケ調整が全体にみられる。焼成はきわめて良好で堅緻、全体的に赤色を呈し、胎土は精選されている。なお、口縁部は当初より欠していたものと考えられるが、頸部の形状からみいて短頸の複合口縁をなすものであろう。

この土器は2か所の穿孔がなされていることからわかるように壺棺に使用された可能性が強い。おそらく、土器の口縁を打ち欠き、木蓋をあてたうえで土中に埋置したものと考えられる。



第21図 土師器壺棺実測図

V まとめ

禅昌寺西遺跡が箱式石棺・土壙墓・壺棺墓からなる墳墓群であることは既に述べたとおりである。この内、箱式石棺は5基が発見されたが、これらは棺の長軸方向を南北にとるもの（Aタイプ）と東西にとるもの（Bタイプ）とに分類することができる。前者にはA主体およびB主体があり、後者には第1号石棺・第2号石棺・第3号石棺がある。

さて、A主体は棺蓋の上部を大小の割石で被覆しており、石棺としてはかなり丁寧な造りとなっている。また棺内には赤色顔料の塗布がみられ、副葬品が武器を主体とする鉄製品のみで構成されている点は前期古墳としての特徴を示すものである。鉄製品は棺内からは鉄剣2本が発見されたが、いずれも細身の実用的なものであり、棺外出土の鉄鏃も無茎広根式の古式のものであることから、A主体の築造時期は5世紀前半の頃に位置づけられよう。

次に第1号石棺の棺を構成する棺材をかなり抜きとられている。そしてそのひとつと考えられる板石が溝状遺構の底面に密着した状態で出土したが、他はA主体の棺材として転用された可能性が強い。このことは、Bタイプの石棺がAタイプのものに先行し、あるいは溝状遺構がAタイプの石棺に伴うことを示唆している。つまり、溝状遺構によって区画された墳丘の主体部として考えられるのはA主体ないしB主体ということができよう。また、A主体とB主体の切り合い関係はB主体の構築が先行することを示している。第1号石棺を含むBタイプの石棺は副葬品が皆無であったため、その築造時期は明確にしがたいが、棺の構造からみてほぼ同時期の所産と考えられ、石棺の形態が鍵向山石棺群^{注1}、西本遺跡群^{注2}、丸子山遺跡の石棺に類似し^{注3}、弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての築造と推定される。^{注4}

第1号土壙は径120cmほどの円形のものであるが、内部から壺形土器の口縁が検出されていて壺棺墓と考えられる。この土器は弥生時代後期の標識とされる上深川Ⅱ式に近い特徴をもつもので、弥生時代後期中葉に比定される。

また、土師器壺棺についてであるが、これは頸部の大半を欠いているため、明確な時期を知ることはむずかしいが、頸部が複合口縁となること、球形に近い胴部あるいは土器の製作手法などは、真庄庵遺跡出土のものに共通する点が多い。^{注5}

C主体はその形態からみて木棺直葬の手法をとるものであろうが、かなり豊富な鉄製品を副葬していることが特徴としてあげられる。この内、鉄刀は内反り気味で古式の様相を呈するものの、鉄鏃は全て長頸で篋被を有している。また鉄製品の中には鉄鎌・鉄斧・刀子等の農工具が含まれていて、C主体の築造時期は5世紀後半に位置づけて大過ないものと考えられる。

以上のことから本遺跡の埋葬主体は、

第1号石棺

第1号土壙 → 第2号石棺 → B主体 → A主体 → C主体

第3号石棺

の順でとらえられ、本遺跡は弥生時代後期から古墳時代前半期にかけて連続的に営まれた埋葬遺跡ということができよう。

- 注1 広島県教育委員会『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡発掘調査報告』（1975）。
- 注2 東広島市教育委員会『西本遺跡群—D. E. F地点—』（1976）。
- 注3 石田彰紀『丸子山遺跡』（「日本考古学年報」第29号 1978）。
- 注4 広島市役所編『新修広島市史 第1巻 総説編』（1961）。
- 注5 潮見浩『真庄庵遺跡出土の土器』（「土師式土器集成」本編1 1971）。



空からみた禅昌寺西遺跡（○印部分，現況）



a 禅昌寺西遺跡遠景（↓部分 1, 2は東遺跡）



b 禅昌寺西遺跡全景



a 箱式石棺の配置状況（開棺前）



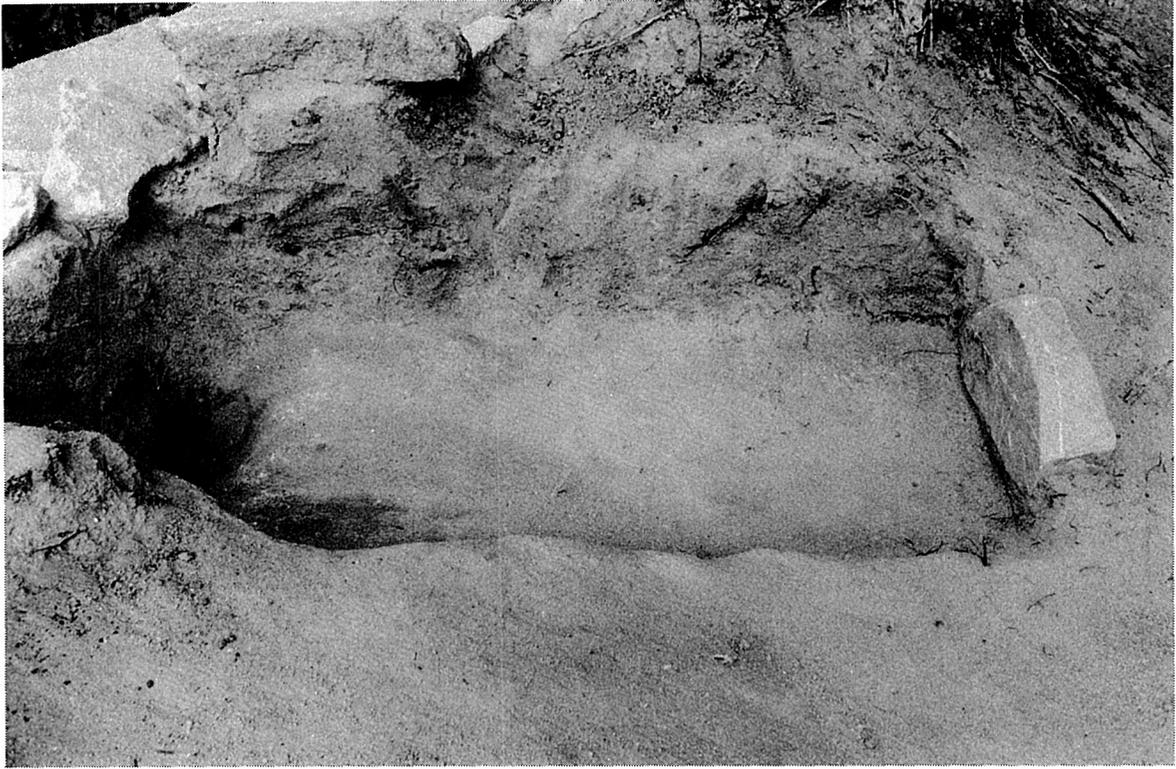
d 箱式石棺の配置状況（開棺後）



a A 主体（東より）



b A 主体（西より）



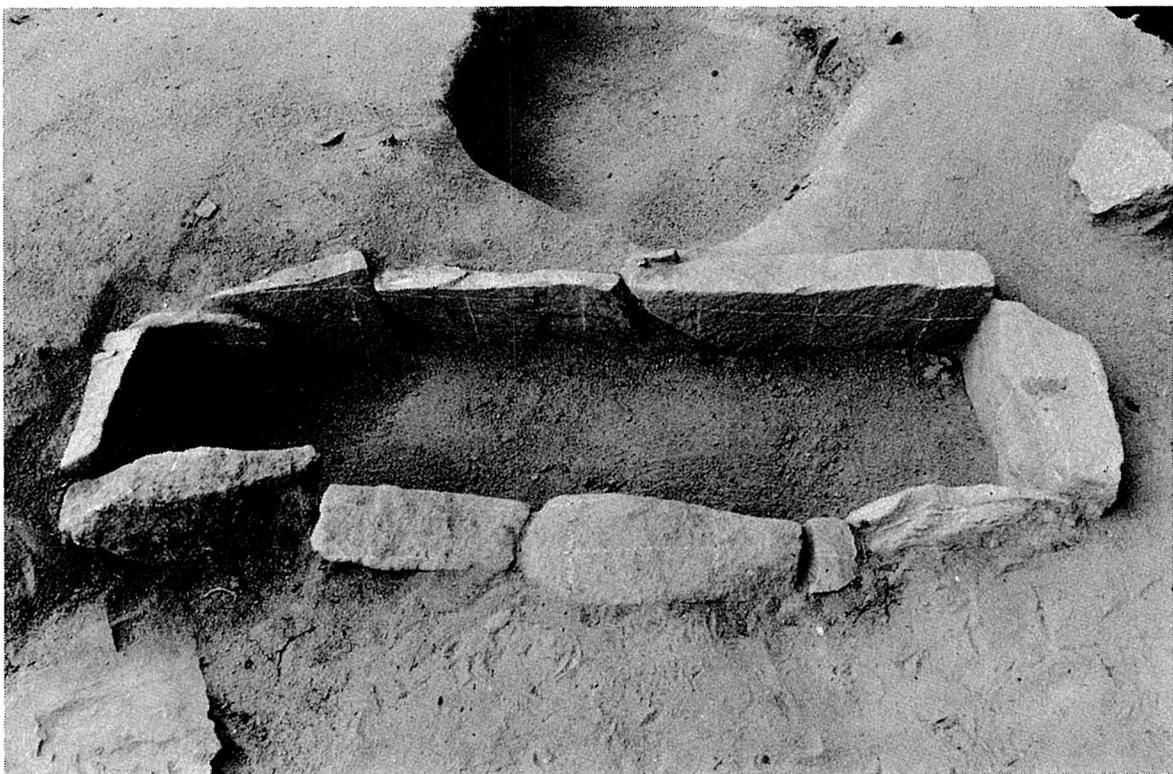
a B 主体（西より）



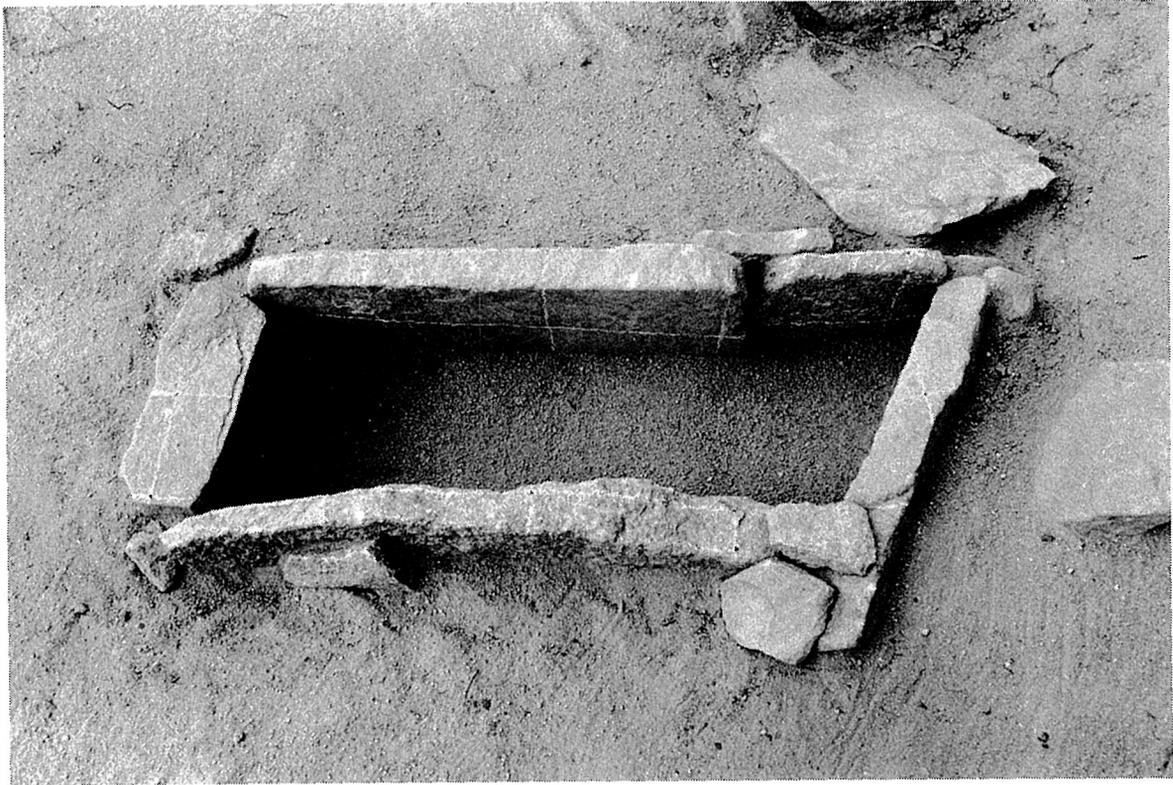
b C主体と土壇群（東より）



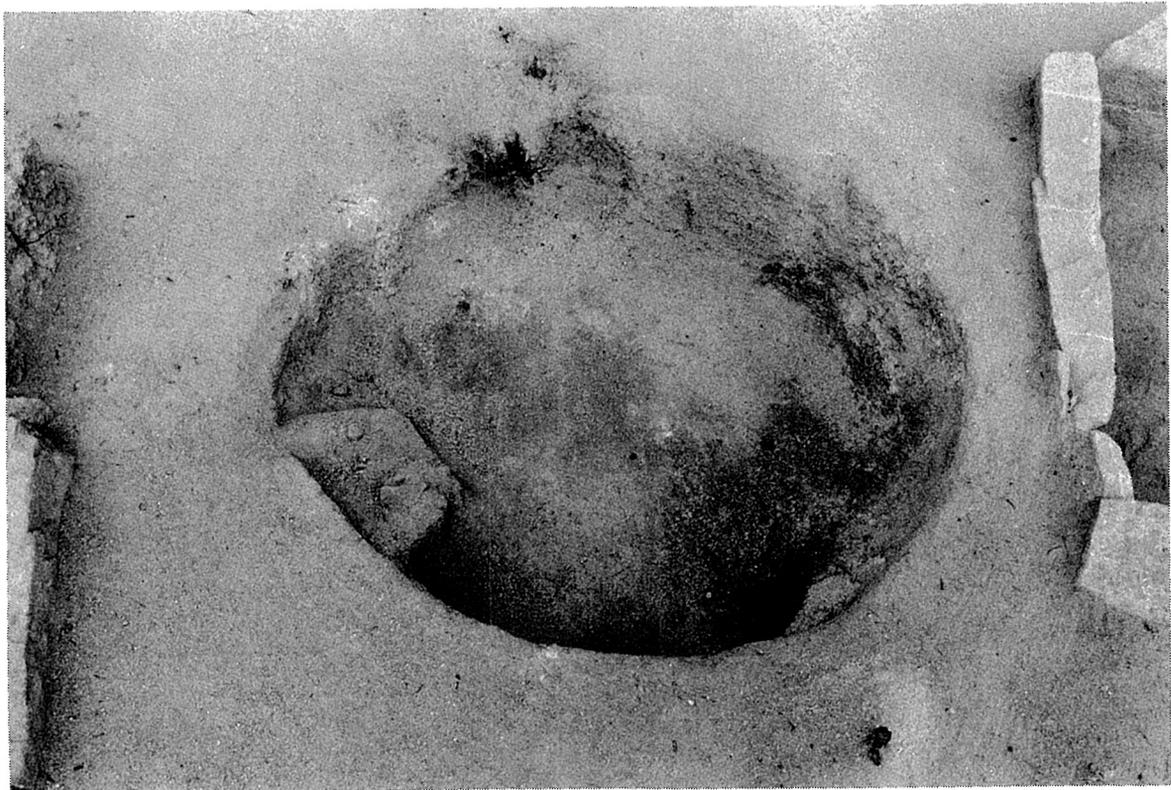
a 第1号石棺（南より）



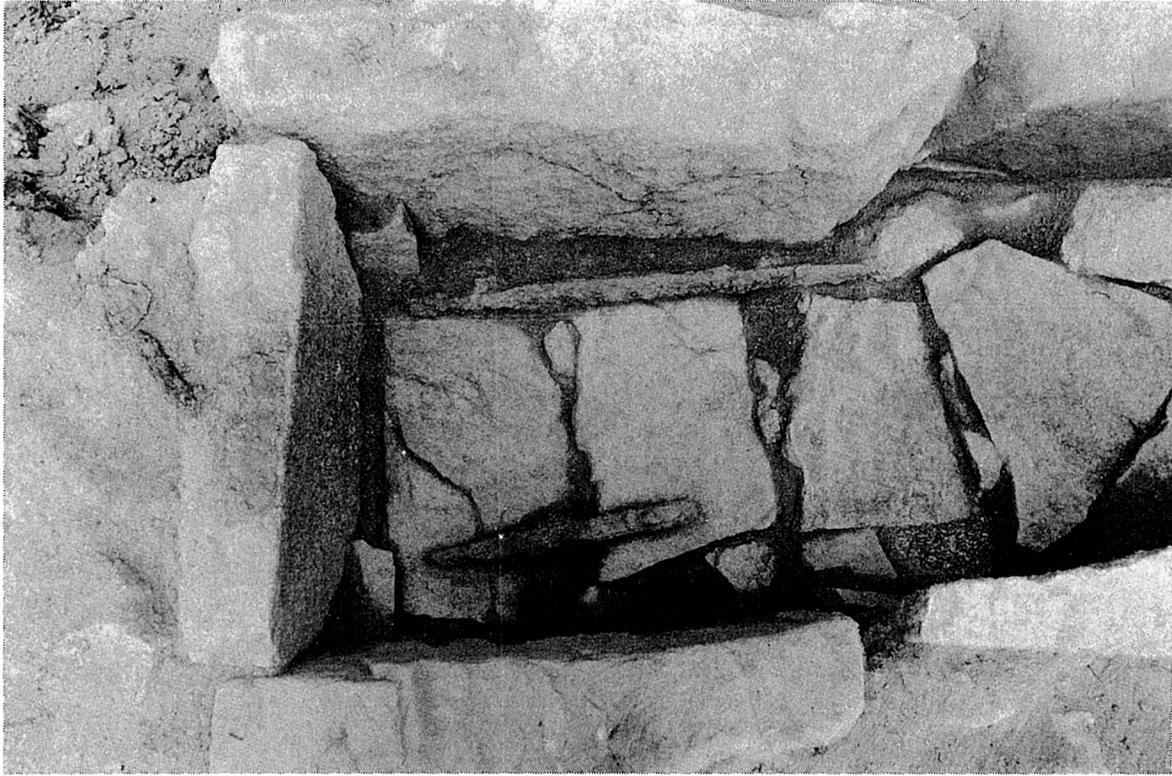
b 第2号石棺（南より）



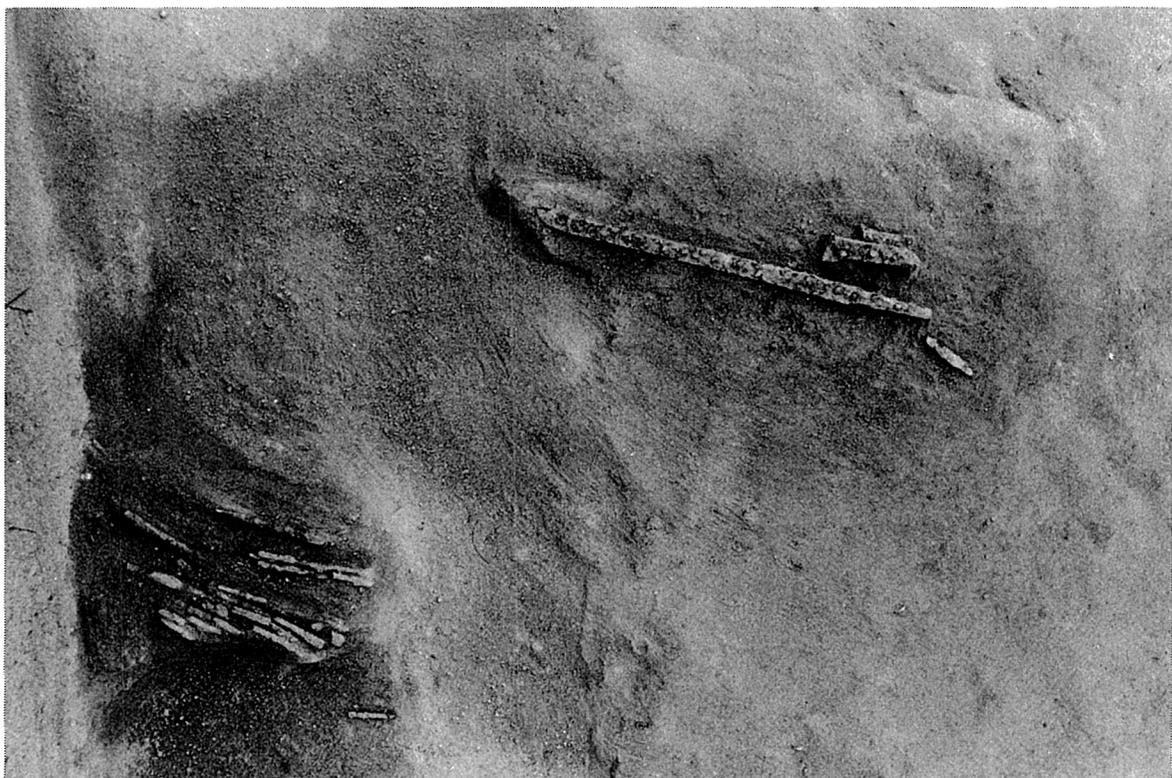
a 第3号石棺（南より）



b 第1号土壙（西より）



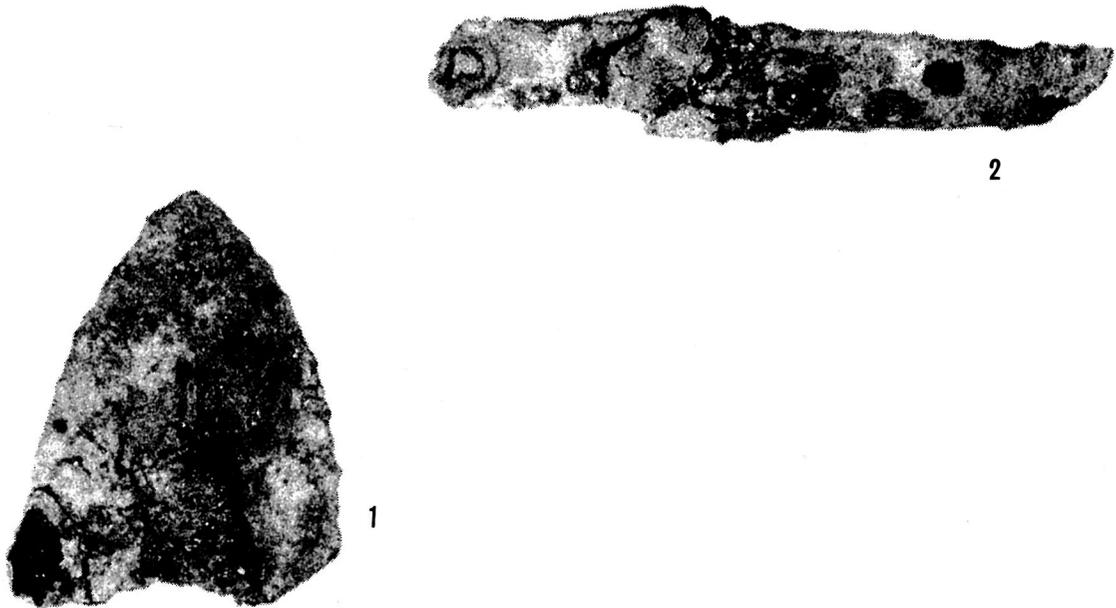
a A 主体遺物出土状態（西より）



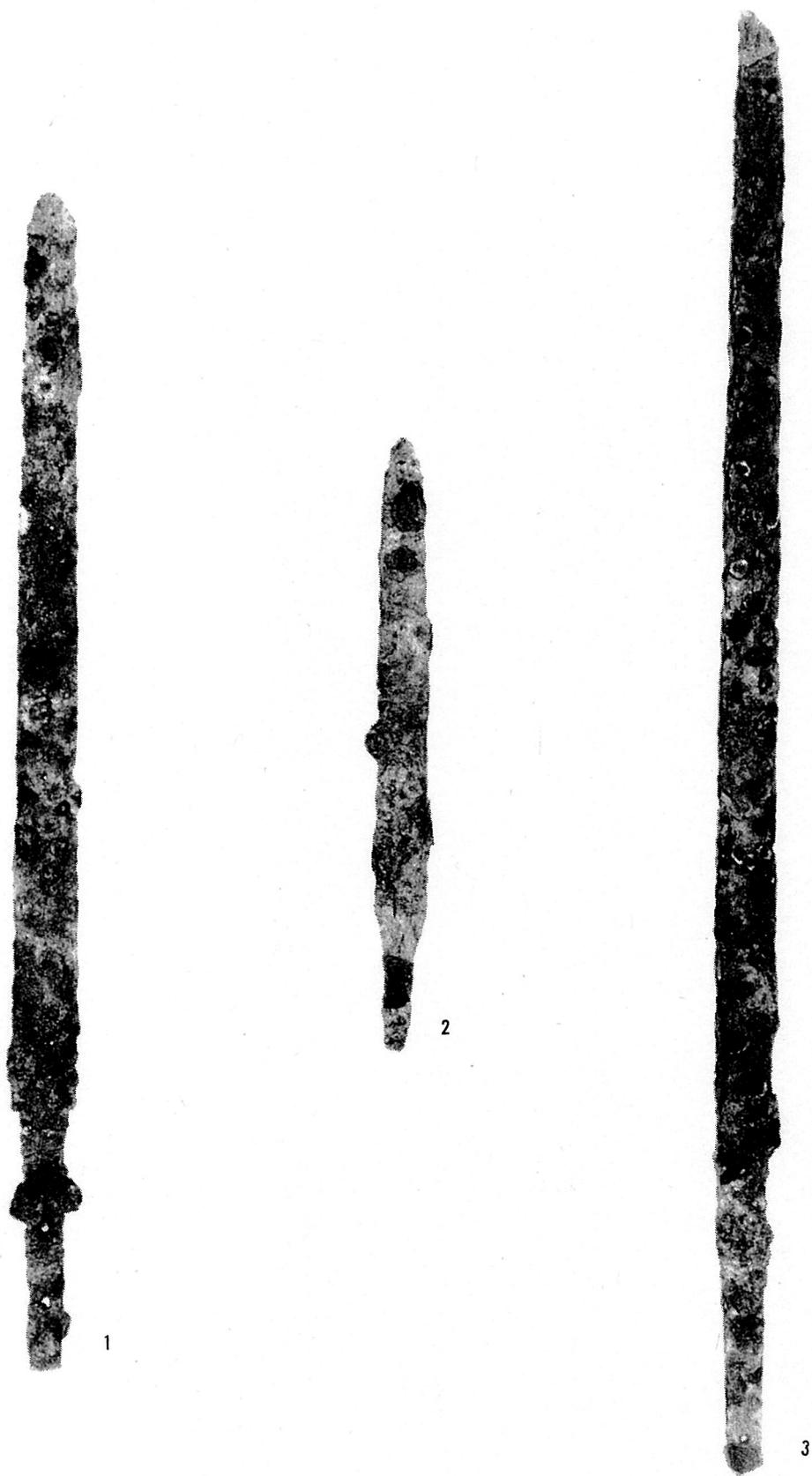
b C 主体遺物出土状態（東より）



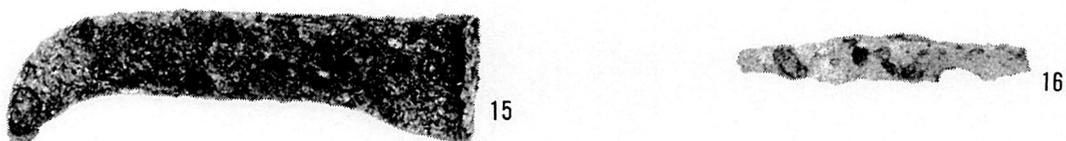
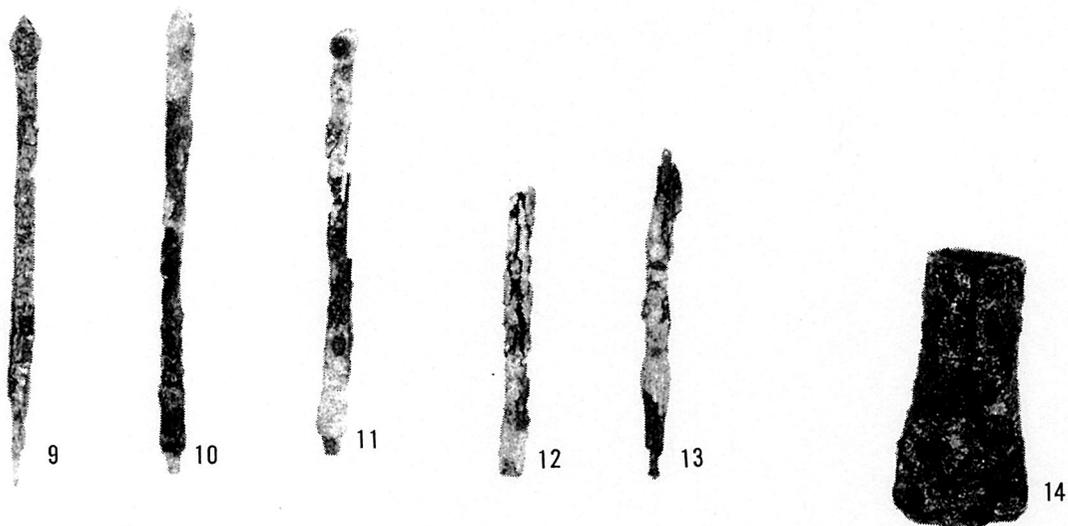
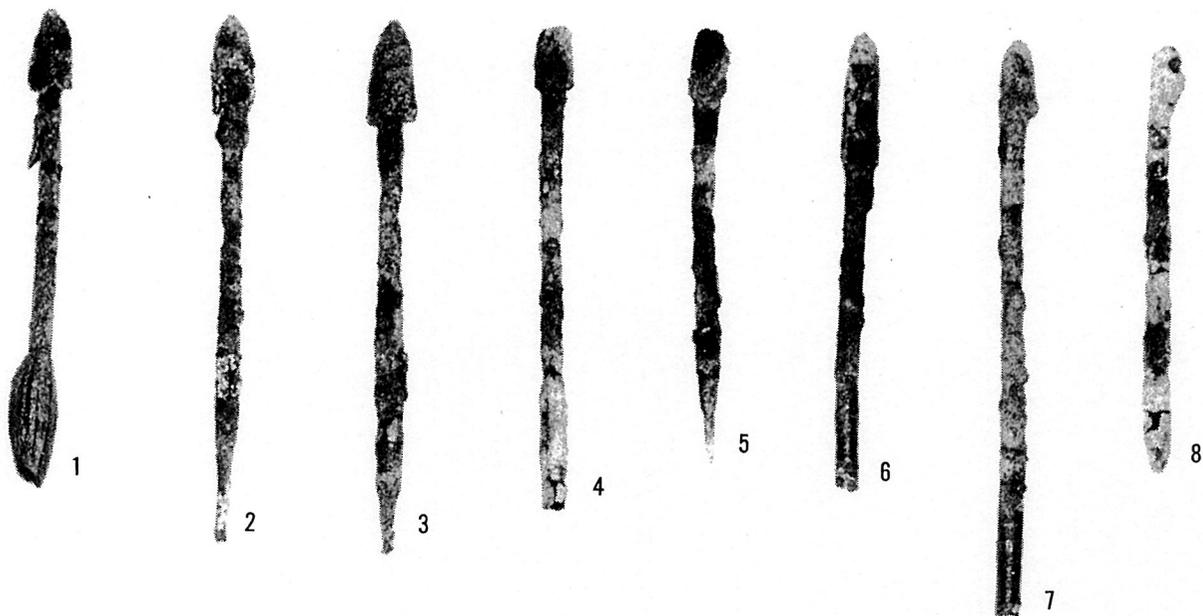
c 戸坂町桜ヶ丘古墳主体部



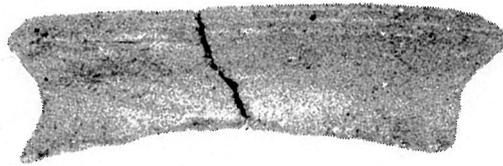
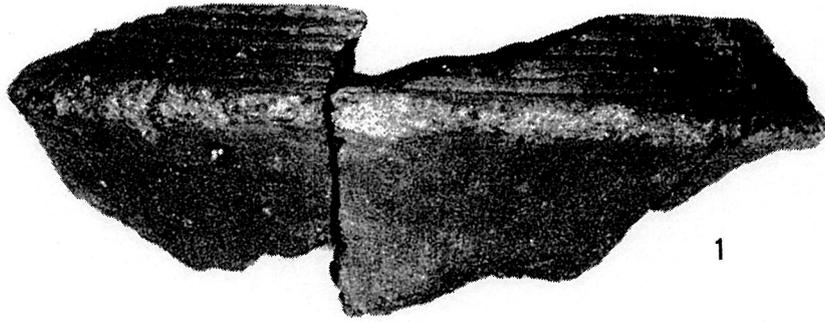
b A 主体棺外出土鉄器（番号は第 18 図に一致）



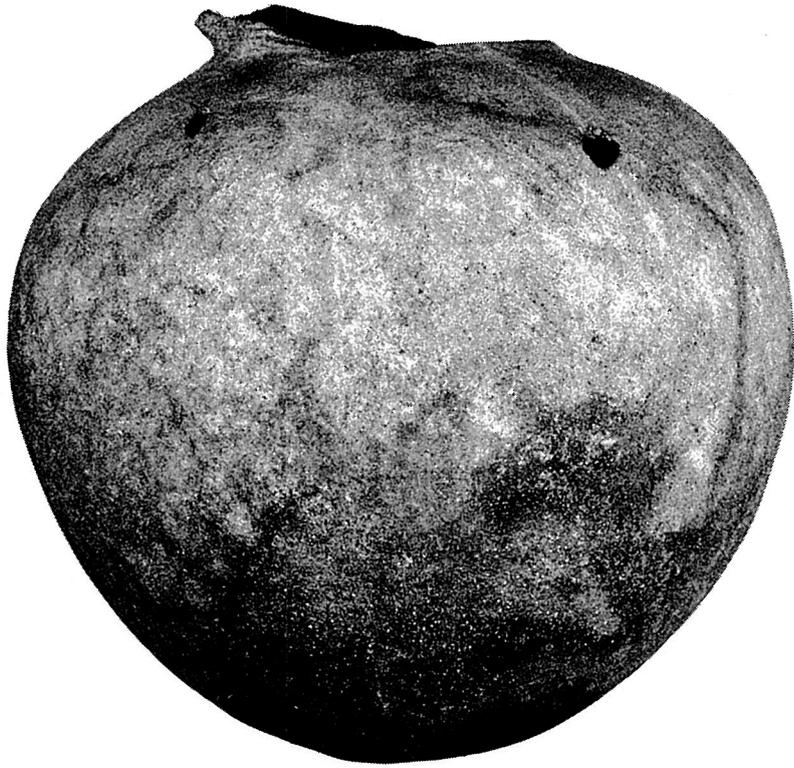
A 主体出土鉄劍(1・2), C 主体出土鉄刀(3)



C主体出土鉄器(番号は第20図に一致)



弥生式土器（番号は第 16 図に一致）



a 土師器壺棺



b 戸坂町山根遺跡出土弥生式土器

広島市戸坂町

禅昌寺西遺跡発掘調査報告

1980年3月

編 集
発 行

禅昌寺西遺跡発掘調査団
広島市中区国泰寺町一丁目6-34
広島市教育委員会社会教育課内
TEL (0822) 45-2111(代)

印刷所

電子印刷株式会社
広島市中区堺町一丁目1-5
TEL (0822) 32-3770